

太 棹



第百十一號

東京 太 棹 社 發行

閑 静

スウハ・アウルシ

高 級

蒲田區御園町二ノ一四
電話蒲田三六二一番

松 幸

すき焼

和洋御料理

淺草公園（千束二ノ三四）

牛鍋本店

電話根岸(87) 〇三八〇番
二〇〇〇番

風流・金ふら・茶漬

【美地旬】

去月屋

新橋二ノ八
電銀二〇八

太 棹

月 一

號一拾百第

祝 紀 元 二 千 六 百 年
祈 皇 軍 武 運 長 久

(掲載芳名順不同)

年 新 賀 謹

中

澤

巴

謹 賀 新 年

武
笠
宏
亮

齋
藤
山
生

電話足立三二四二番

年 新 賀 謹

近
江
清
華

年 新 賀 謹

安藤どくる

祝紀元二千六百年

祈皇軍武運長久

東都五十義會々長

細川清

本所區東兩國二丁目四
電話本所〇八一八番

年 新 賀 謹

鈴
木
松
寶

謹 賀 新 年

坂

倉

素

遊

高

瀬

操

謹 賀 新 年

白
井
清
華

金
田
金
鳳

謹 賀 新 年

保
々
長
平

勝
田
松
雨

謹 賀 新 年

喪中ニ付年賀欠禮

松

岡

語

松

小

林

和

舟

謹 賀 新 年

大 築 葵

富 岡 生 昇

平 山 平 茶

井 上 素 鳳

謹 賀 新 年

大用大嘉津

乃村乃菊

菊地秋月

平井榮

謹 賀 新 年

吉川浪補

岩木義雀

廣瀬いろは

緒方千晴

謹 賀 新 年

西
田
可
松

錦
錦
松

喪中ニ付年賀欠禮

湯
淺
光
玉

喪中ニ付年賀欠禮

岡
本
柳
光

謹 賀 新 年

松岡茂里雄

藤本喜鳳

野口みなと

小林照八

謹 賀 新 年

鈴木和樂

高橋可遊

坂本あるを

電話淺草八七八二番

寺岡三幸

謹 賀 新 年

京濱素義聯盟會長

國 友 東 光

品川區大井
水神町二〇三六

及

川

旭

巴 雪 會

阿 部 一
高 山 和 子
梅 村 梅 聲
長 澤 喜 遊

謹 賀 新 年

原
田
越
巴

淺
田
奇
聲

壽改メ

水
戸
部
い
づ
み

小
川
都
山

小
川
都
川

謹 賀 新 年

根
本
團
壽

神 馬 里 芳
鶴 澤 勝 助

吉
田
登
盛

喪中ニ付年賀欠禮

謹 賀 新 年

長 谷 川 文 久

星 野 桔 梗

吉 田 三 芳

安 藤 光 樂

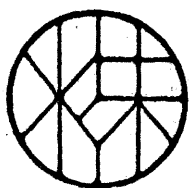
祝紀元二千六百年
祈皇軍武運長久

東都五十義會

事務所

本所區東兩國二丁目四番地
(細川方)電話本所〇八一八番

年 新 賀 謹



兜

會

事
務
所

日本橋區兜町一丁目四番地
鈴木甚四郎方
電話茅場町二三五五六番

謹 賀 新 年

名 作 淨 瑠 璃 同 好 會

(順ハロイ)

松	仙	谷	川	松	飛	久	安	森
林	臺	口	口	浦	石	米	藤	
福	八	王	子	淀	か	忠	都	市
笑	雲	華	太	橋	な	二	昇	菊
			郎		め			

事 務 所

平	高	保	西	星	中	河
山	橋	坂	村	野	川	野
平	宮	有	游	桔	愛	國
茶	古	曲	史	梗	氷	聲

京橋區榎町三ノ五
川口方

電話京橋四八七七番

年 新 賀 謹

巴 津 天 會

會 長

寶藏寺天昇

相談役 宮 島 和 紅

常務理事 武 藤 壽 昇

事務長 長 谷 川 勇 昇

顧 問

竹本巴津昇

事務所

杉並區和田本町九五
一竹本巴津昇方
電話中野五七九三番

年 新 賀 謹

したしみ會

(順ハロイ)

中石中岡林
野川野崎
清華吳圓和
子笑羽六勢

駒

登

會

芝區高輪南町三〇

豊竹駒登太夫

年 新 賀 謹

會 名 無 曲 淨

(見 後)

事務所

電話下谷五四〇〇番

(河 野 方)

神田區花房町三

星	鈴木	桑	高	河	保	安
野	木	原	瀬	野	々	藤
桔	和	美		國	長	ど
梗	樂	峰	操	聲	平	く
						ろ

(イロハ順)

會 見 朝

竹	平	島	白	酒	青	小	小	松	山	野
本	井	倉	井	井	島	崎	口	岡	崎	中
朝	壽	松	井	千	廣	鬼	千	波	昇	一
見	樂	香	孝	朝	昇	若	昇	朝	朝	竹
太										
夫										

(イロハ順)

年 新 賀 謹

會 聲 芳

豐澤芳太郎

清 千 一 辰 里

芳 壺 重 壽 芳

(イロハ順)

會 老 中

(順 ハ ロ イ)

事務所 下谷區金杉二丁目一〇
電話 根岸 四九四〇

和 田 春 斗 和
北 島 北 松
西 田 可 巴
原 田 越 司
保 谷 紅 明
柳 有 紅 司
淺 田 奇 聲
高 瀨 奇 聲
木 下 松 玉
松 岡 茂 里 雄
沼 井 盛 鶴

謹 賀 新 年

銀 座 義 榮 會

香 伯 會

謹 賀 新 年

鳥 の 會

(イロハ順)

栗原千鶴

庵 かゆめ

片山つばめ

鈴木兒雀

中島山鳥

塚口清雀

事務所

京橋區築地二ノ十五

(栗原方)

電話京橋四四五四番

東京市豊島區千早町二ノ三七

岡田蝶花形

(電話落合三〇四七番)

雜誌淨曲研究 一年分 送料共壹圓
テンネ排斥論 郵券三錢送付進呈

鑛業 奥村彌一郎

三 玉

日本橋區吳服橋二ノ三
電話日本橋九三四番

謹 賀 新 年

日本義太夫因會

男子部一同

事務所

日本橋區蠣殼町一丁目六

電話茅場町一九二七番

日本義太夫因會

女子部一同

臨時事務所

下谷區敷寄屋町十七番地
電話下谷四八九一番

謹 賀 新 年

喪中ニ付年賀欠禮

竹本都太夫

鶴澤司好

野澤語左衛門

鶴澤寛三郎

野澤道之助

謹 賀 新 年

竹
本
素
女

竹
本
佳
照

淺草公園

義太夫座

橘館

江戸館

竹
本
駒
若

淺草區田島町三七

電話淺草三六三〇番

豐
竹
昇
登

豐
竹
巴
住

奉祝聖戰下新春

本年は特に

藝術報國に専心

努め度いと存じます

南北座

座員一同

(事務所)

東京市目黒區中目黒
四丁目一四七五番
電話大崎三八二九番

謹賀新年

北支 河北省景縣城內

三景事 竹澤龍造

外一同

女優娘歌舞伎家之

竹澤龍造補導一座

主幹 竹澤龜次郎

外一同

熱海市旭町

新鈴よし

三鶴松
外一同

謹 賀 新 年

株式會社

大彌商會

八幡市通町十六丁目

電話 八四八・二五六〇番
二四六六・専用一番

(員 社)
古賀大彌
古賀房千代
古賀昇之助
古賀おゆ茶
嵯上九洲翁
稻田稻雀

濱口肩衣店

濱口秋華

日本橋區人形町一ノ七
電話茅場町二六三五番

東京市指定

手塚佐市商店

てづか

水道衛生器具
瓦斯電氣器具
汚水淨化裝置
暖房給湯工事
水道衛生工事

東京市京橋區西八丁堀四ノ二ノ一
電話京橋(56)一三四一
振替東京九九一一一三番

謹 賀 新 年

氏 家 鶴 峰

阪急沿線塚口住宅一、一七四

岡 田 源

兵庫縣垂水町

川 奈 部 銀 司

千葉縣船橋町

謹 賀 新 年

大垣市城畔

吉岡十八公

西村紫紅

大阪市東區兩替町一ノ二三二

岩崎山彦

安東市北一條通四丁目

年 新 賀 謹

物名 御守最中

うろこ餅

みのり

高級あられ五種の詰合
御進物用……金壹圓より

煉羊羹

★★★★
趣味の名菓
名なし草
★★★★

花の名にちなめる小形菓子
三十餘種を取あはせたる純
江戸趣味の御菓子
御進物用かん入
風流 壺入
はかり賣金八拾錢より

前宮 天水橋 本日

店本堂原三

番六六六二町場茅話電

太 棹 社

富取芳河士
同 三久子
關本邦治

栗原印刷所

牛込區早稻田町五八
電話牛込一四五一番

事慶の師夫太津本竹



大阪文樂座紋下竹本津太夫師は、大阪日本因會に入會して茲に五十五年、文樂座に入座して之又五十五年目。同師は本年七十二歳の齡を迎へ、妻女ちか子さんは七十七歳喜の字の祝ひに相當し、日本因會より三ツ組銀盃が授與されたが、夫婦四十餘年、圓滿なる星霜が重ねせられた事は斯界にも珍らしく、新春の話題となつてゐる。

師は昭和九年紀元の佳節に大阪府知事縣忠氏より藝術功勞賞として、推獎狀並びに硯屏とが贈られたが、寫真中、床の軸は嘗て師が故大谷尊由氏に招かれた時に、その賞狀を祝して氏が直ちに『萬歳』と揮毫して興へられしもの、皇紀二千六百年に當り、この芽出度き村上家を壽ぐと共に、將に同家の家寶である。(寫真は竹本津太夫師夫妻)

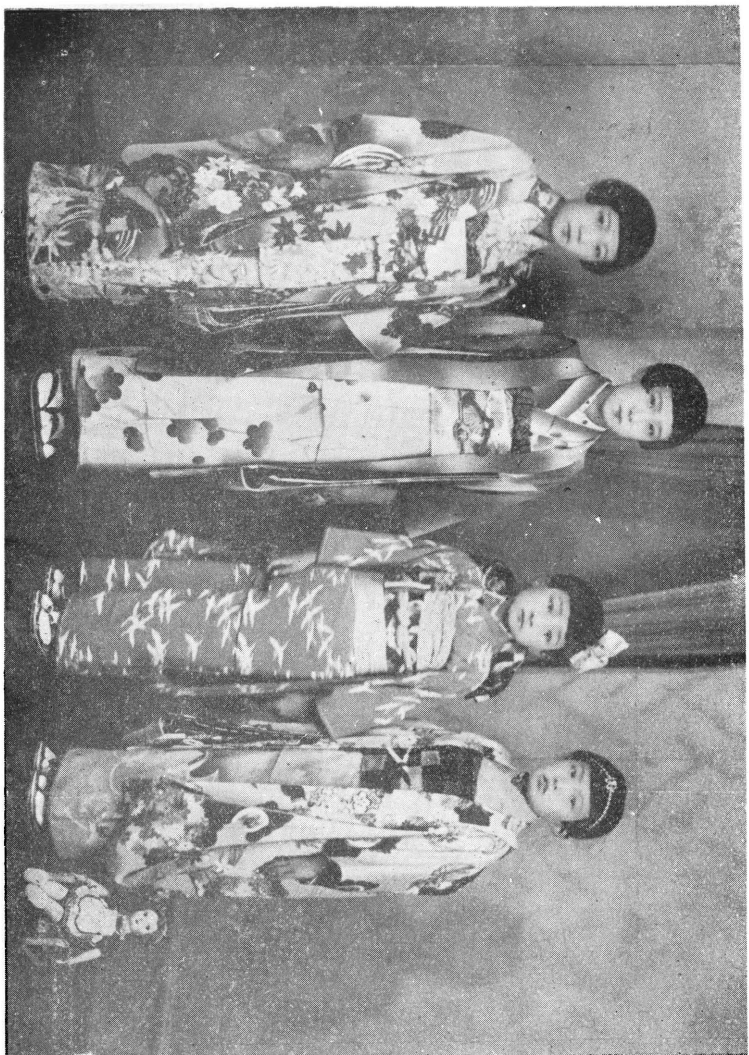
大亦觀鳳氏邸に於ける池田三國氏



大亦觀鳳氏邸にて催はされた。の會を他の人々に依り、人形擁護の爲め『池田三國氏の人形を見るの會』を大亦觀鳳氏邸にて催はされた。

寫眞前左より二人目は應司公爵・次は小杉政隆畫伯・人形を持てるは池田三國氏

神馬里芳令孫のお祝ひ



神馬里芳氏の三愛孫の七五三のお祝ひは一年置きに続けられますが、舊臘は末孫厚子様のお祝ひがありました。

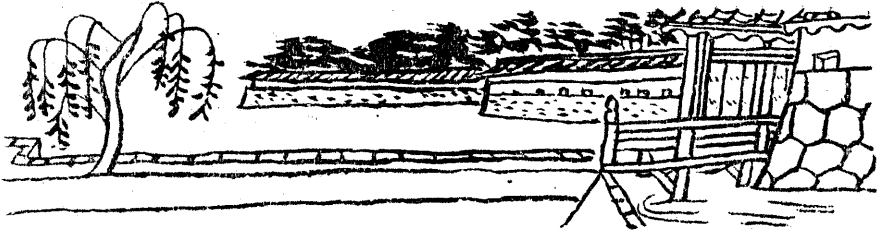
寫眞向て右より……………喜代子（九歳）厚子（七歳）禧子（十一歳）姪笑子（十一歳）の諸嬢

君郎三義木高……爽颯

(兒愛氏郎太芳澤豊)



寫眞は昨冬五歳のお祝ひ——義三郎君は記者の肩に手をかけ「叔父さん、僕もこんな洋服持つてるよ」



太 棹 第百十一號 目次

	樋口 吾笑氏に……………	近江清華……………(七)
	浄曲三絃閑話(三)……………	是澤九似廬……………(八)
	忠臣藏とその女性……………	西村游史……………(三)
	黒衣漫言を讀んで……………	齋藤拳三……………(七)
	女 義 昔 話……………	岡田蝶花形……………(三)
	ラヂオ浄曲漫評……………	金 王 丸……………(四)
沼津 八百屋	『三惡道』と其の發音……………	齋藤金太郎……………(二)
	國聲氏の「堀川」を聽いて……………	内田富太郎……………(六)
	文 樂 樂 屋 圖 譜……………	宮尾しげを……………(三)
	太 棹 社 彙 報……………	……………(三)
	太棹ニュース・當座帖……………	……………
	編 輯 後 記……………	芳河士記……………
	口 繪……………	紋下竹本津太夫師の慶事・人形研究の池田三國氏・ 神馬里芳氏の令孫・高木義三郎君
	表 紙・カ ッ ト……………	宮尾しげを……………

沼津『三惡道』と其の發音

「サンマクダウ」と「サンナクダウ」

齋藤金太郎

沼津『三惡道』と其の發音

「サンマクダウ」と「サンナクダウ」

昭和十四年十一月發行の浪花名物淨瑠雜誌第三八四號記載
文樂座霜月興業合評記の内に、竹本津太夫の語つた沼津の段
の合評中に「子故に迷ふ三惡道」に就て左の記事があつた。

（森下。鴻池。武智。樋口。の四氏合評）

森「子故に迷ふ三惡道は」五六年以前に本誌で大分問題に
なつたやうに記憶して居りますが、こゝはどうしてもサン
マクダウと發音すべきです。いや絶対にサンナクでは間違
ひです。それは法善寺の津太夫もサンナクと云ひました。
大隅も、越路も、大椽もそう云ひました。然しこれは間違
ひです、サンとあるからアをナと發音するのは素より正當

ですけれども、三惡道とは佛語です。地獄、餓鬼、畜生、
の三道を佛語で三惡道、即ちサンマク道と云ふのです。ア
クは吳音でマクと發音するのです。南無阿彌陀佛をナムア
ヤダブツと云ふては通じません、彌は吳音でミです此道理
同様です。私は大椽や法善寺や先代大隅の時代が今日であ
りましたら、此三名人にでも説明して改めて貰ひます。こ
んな明白な間違ひを師匠や先覺者が云ふたから、自分も云
ふのだと云ふのなら、それは頑愚と云はねばなりません。
名人と雖も發音學者ではない、過つて改むるに憚る勿れで
す。個人を離れて道の爲めに注告するのです。
鴻。武。樋。正當なる理窟です、大賛成です、本誌同人一
同から紋下に今後は改めて貰ひたひと希望します。
實は私に岡田蝶花形氏が、素女さんの沼津を聞いて「三

惡道」はサンマクダウと發音するのが正しいと話されたので、私は直ちに之れを否定して置きました所、右記事の載つた雑誌を見せられたので、聊か驚いて尙慎重に種々調べもし又専門家にも聞いて見たのであります。

右記事を見ますと、五六年以前にも大分問題になつたとあります、其の後今日尙ほ津太夫始め一般に三惡道はサンナクダウと發音されて居る様ですから、其の當時どんな問題になつて又どんな事で解決されてるか私には全く不明であります、今日更に右記事に由りますと、三惡道をサンマクと發音する事が絶對であるとの言論に及んで、尙津太夫にも又一般にも之れが訂正を求むる様記載されてありますので、其及ぼす影響は甚大であると思ひまして、私は左に其の反對理由や反證を擧げて「三惡道」はやはり従前通りサンナクダウが正しいと信ずる事を掲げて見る事に致しました。

佛語より觀たる『三惡道』と發音

佛敎語では「三惡道」と云ふ語は可成り多く、經典中にも訓譯、訓讀、説敎等の場合にも相當多く用ひられて居りまして、其の意は衆生（吾人）が佛を信ぜず、諸々の煩惱や惡縁等に迷ひ自己の業に引かれて三惡道即ち地獄、餓鬼、畜生の三つの惡道に墜ち趣き住むと云ふ事で義太夫沼津の場合では平作が親子惡因縁の爲め子故の闇に迷ひ（本海道と三枚橋をかきかして）遂に自己の業に引かれて、此の三惡道に轉げ墜ち

て行くと謂ふ佛語を用ひて、此の一段の締め繰りを付けた名文句であります。

佛語の中には此の三惡道の外に、單に惡道と謂ふ場合があります。又之れに脩羅を加へて四惡道と申します。更に又人間、天上を加へて之れを六道或は六趣と申します。（寺子屋の奥で『六道能化の弟子になり』と云ふ佛語を用ひた文句があります、即ち能化とは敎化と云ふ事で、地藏尊は六道を敎化する佛でありますから、地藏尊の弟子になると云ふ意です）又『三惡道、四惡道と謂ふ外に、之れを道は趣き住むと云ふ意がありますので、惡趣。三惡趣。四惡趣と申す事もあります。

然るに經典を誦する場合も又之れを『訓譯』『訓讀』『説敎』する等の時も惡は阿克であつて、決してマクとは發音しないのであります。即ちアクダウ。サンナクダウ。シアクダウ。及びアクシユ。サンナクシユ。シアクシユ。と發音するので決して之れをマクダウとかサンマクダウ及びサンマクシユ。シマクシユ。等と發音しないのであります。

引例（一）法華經第一卷方便品の内

『破法不信故。墜於三惡道』とありますが、之れを讀誦する場合ハーホーシンコ。ツイオーサンナクダウと發音します。（振り假名もサンナクダウとあります）

引例（二）化城諭品第七の訓譯中

『三惡道充滿し。諸天衆減少せり(中略)諸の惡道減少し』とありますが、振り假名は何れもサンナク及びアクダウとなつて居ります。

引例(三) 妙行日課の中

『惡を起せば三惡の身を感じ。又は惡象の爲めに殺されては三惡趣に至らず。惡友の爲めに殺されては三惡趣に至る。又は疑ひ生じて信ぜざらん者は即ち常に惡道に墜つべし』云々等の振り假名は惡は皆アク又はナクとはつきり書かれてあります。

又惡をナクと發音する事は、佛語に限らず世間語即ち一般語でも同じで、母音即ちアイウエオの前に『ン』の發音が來た場合、其の母音即ちアイウエオは、ナニヌネノに發音される事で、善惡はゼンナクと發音し天一はテンニチとなり、義太夫でも御歌はオンヌタ。因縁はインネン。御送りはオンノクリとなる例の如く、三惡はサンナクと發音される事となるのであります。又此の發音法は英語でも同じでワンオツクス(一匹の牛)をワンノツクスと發音し又ワングツグ(卵一個)をワングツグと發音する例の如くであります。之れは解り切つた事ですが只一寸参考迄に記します。

吳音から觀た『三惡道』と發音

森下氏は『三惡道』の惡は佛語で、之れはアク又はナクと發音しては絶対に悪い、吳音でマクと發音するのである、と謂ふ事でありませんが、私は佛教學者ではありませんから、佛語中の惡を吳音でなんと發音するか能く解りませんが、佛敎専門家の二三の人に之れを聽いて見たのですが、やはり佛語中の惡は讀誦の際にも又説敎の際にもアク又はナクと發音するので、マクと發音する事は知らぬとの事でありました。故に吳音に就て左に少しく記して見ませう。

吳音とは何ぞや

吳音とは昔支那に於ける漢より古い吳の時代に非常に佛敎が盛んでありまして、其の吳の時代の發音が其儘残つて日本にも移入され、今日尙佛語の中に此の吳音が使はれて居るのであります。

大體佛語には吳音。印度音。漢音。等に別れて居る様であります。

印度音としては陀羅尼經等が有名であります。

アニ。マネ。ママネ。シレ。シヤリテ。等の音であります。

吳音としては佛語中には澤山ありますが、大體義太夫中に在る佛語で吳音で發音さるべき種類のもの拾つて左に記して見ませう。

引例(一) 『聲』(ユエと發音せず)

一切聲聞。馨刻聲。指之聲。聲聲聲等

引例 (二) 『品』 (ヒンと發音せず)

神力品。壽量品。方便品。無量品。等

(妹脊山の中に「讀さしの無量品親が讀誦する間」經卷の名です。品をボンと發音します)

引例 (三) 『彌』 (ヤと發音せず)

阿彌陀。彌勒菩薩。彌樾山。沙彌。等

(義太夫中では一谷で一念彌陀佛や彌陀六。又梅忠で阿彌陀傘。等皆ヤと發音せずミと發音します)

引例 (四) 『業』 (ギヤウと發音せず)

業。惡業。業報。業緣。三業。等

(合邦では「惡業深き俊徳に」朝顔では「此の目は如何なる惡業ぞや」とありまして皆ゴウと發音されます。人間の身、口、意に現はるゝ動作が總て煩惱にあらざるなきを以て之れを業と申します)

引例 (五) 『須』 (スと發音せず)

須彌。須彌山。須菩提。須梨槃特。等

(此の中沼津の内に「須彌大海にも勝つたる」とあります。即ち須彌とは量り知らざる無限の高さ深さを謂ふので

ありまして、須海には山、海、樓等がありまして、沼津の場合では親の鴻恩を謂ふのであります。又吃又の中にも「名は須彌山とつりがへ」と云ふ文句等あります。皆すと發音せずしてシユと發音します。

其の他佛語には非常に多くの吳音がありますが、前記の如く其の吳音は之れを讀誦する場合も訓讀中にありても説教又は世間語(通常語)の中にあっても、彌をミ品をホンと發音する如く、必ず此の吳音で發音されて居る様です。又従つて之れを吳音で發音せなければ通じない様であります。(但し特例として天臺宗其他の宗旨の中で聲明と謂つて、三歸三寶禮の如き場合漢音を一部用ふる宗旨もあるとの事です)

淨瑠璃より觀たる『三惡道』と發音

前記の如く吳音で發音さるべき佛語は、假へ之れが經典を讀誦する場合も訓讀する時も又説教する際も、皆吳音で發音せなければ通じない様に、其の佛語が淨瑠璃中に在つた場合も同じく之れは吳音で發音せなければ勿論通じない事は明瞭であります。

故に淨瑠璃中にも可成り多くの吳音を使用する佛語が在りますが、之等は今迄に於ても皆吳音で發音されて居ります。即ち(熊谷陣屋)彌陀をミダと(沼津)須彌をシユミと(吃又)須彌山をシユミセンと(妹脊山)無量品をムリヨホンと(十種香)優曇華をウドンゲと(壬生村)優婆塞をウパソク等の如くであります。

故に森下氏の申さるゝ通り、沼津の『三惡道』の惡の語が佛語にして吳音でマクと發音するのだとすれば、淨瑠璃中の在る佛語の惡と謂ふ語は皆之れを絶對にマクと發音せねばならぬ事になります。即ち之れを擧げれば左の如し。

(一) 八百屋お七の中の『梯は即ち劍の山。登る心は三惡道の通ひ道』

(二) 國性爺の中の『十惡五逆の科人とも見る目いぶせく痛はしく』

(三) 合邦の中の『惡業深き俊徳にまだく罪を重ねよとか又は前世の惡業消滅と』

(四) 朝顔の中の『此の目は如何なる惡業ぞや』
右の如き佛語の中の惡の語を皆之れをマクと發音したならば聽

衆はどう感じるでせうか。まだ三惡道をサンマクダウと發音しても些程感じませんが、此の目は如何なるマクゴウゾヤ等、又は前世のマクゴウ消滅と等發音したらそれこそ全く通じなくなる事は明瞭であります。又在來三惡道と同じ佛語である等の惡の語を、何故共にアクをマクに改めさせようと思なかつたのでせうか、否それは反つて悪い事でもあります。

以上の反證の理由に依つて、私は『三惡道』はやはり従前通りサンナクダウと發音し、其の他の佛語の惡も皆やはりアクと發音さるべき事が正しいと深く信ずるのであります。尙森下氏の申さるゝ通り、私も個人を離れて斯道の爲め茲に進言致した次第であります。(昭和十五年一月七日)

二千六百年の流れ底靜かなる鐵の統制 地 橙 孫
咳きも翁めかしてをらが春 煙 亭
皇紀二千六百年お！お！大八洲 田 庭
別 府 に て

温泉の町の元日や双葉山通る 鹿 語
元日の今日一日今日一人松に吹く風を聞いている 芳 河 士

樋口吾笑氏に 近江清華

貴誌昨年十一月號十二月號の誌上に於ける鴻池氏、森下氏並びに貴下の文樂批評を拜讀、聊か愚見を述べさしてもらひます。

私は兩親共大の淨曲好きにて、攝津大塚、法善寺津太夫、初代呂太夫、三代目越路太夫外諸太夫の今日迄の淨瑠璃は、母に抱かれながら聽かされ、又私も廿三歳の秋頃から今日迄、小三十年間樂しみとして月謝を納め、今年七十七歳の當地在住鶴澤觀西翁師よりも聞いた事等、又今日迄大阪の諸先輩より拜承した事などを思ひ浮べますに、三氏の文樂評は極端に津太夫をこき下ろし、古靱太夫を持上げてはいないでせうか。

諸藝には皆好き不好きがありません、歌舞伎芝居で大阪の故人成駒屋最負もあれば、松島屋を藝の虫ぢやとか云はれて、最負にした人もあり、東京で現代の音羽屋好きもあれば、播摩屋最負もあります如く、津太夫は津太夫の持味があり、古靱太夫には古靱太夫の特色があります。

津太夫の沼津等は、當今津太夫の右へ出る者はないと申しても過言ではありません。古靱の沼津も拜聽した事もありますが、勿論悪からう筈はありません、誠に結構です、然し津太夫には及ばぬかと思ひます。

古靱太夫の岡崎は拜聽致しませんが、東京で上演された語り物の内良辨杉等は津太夫も及ばないと思ひます。然し、故人の柳適太夫の良辨杉を耳にしてゐられる方々は大阪に澤山ありませうが、柳適太夫の良辨杉には古靱太夫も未だ及ぶまいと思はれます。

天狗雜誌は先代より今日迄、文樂の、いや淨瑠璃の爲めに生活してゐるならば、常織を以て批評すべきでないでせうか。友治郎なども悪く書いてありますが、友治郎には古靱太夫も度々稽古に行つてゐると聞いてゐます。

大夫紋下、三味線紋下をこき下ろして、此淨曲の發展に反しはしないでせうか。大阪鴻池と申せば、大阪で名高い舊家ではありますが、現在批評されて居らるゝ當御主人は御歳も三十歳前後の由、なか／＼此むつかしい古曲藝術の批評は如何なるものでせうか、古本を調べた位では如何かと思はれます。

人形などでも私は御説の通り榮三が大好きです、然し榮三に女形は遣へませぬ。文五郎に立役は無理です。結論として津太夫、土佐太夫、古靱太夫等は現在では國寶です。友治郎、道八、觀西翁、榮三、文五郎之又國寶ではありませんか。



淨曲三絃閑話 (三)

是澤九似廬

賢問に對して愚答す

太棹第一百七號の誌上に載せた、文樂座東京引起興行の批評の中に、津太夫が菅原四段目の松王の泣き笑ひが中途で拍手のために精神の氣魄が碎けて其後は、技巧の泣き笑ひになつたことは遺憾であつたと、書いたゝめに某氏から、紋下津太夫ともあるべき人が、拍手などで、淨瑠璃の笑ひの氣合が碎ける筈はあるまじく、松王の泣き笑ひも、もと／＼技巧にあらずやとの質議、一應は最ものところもあり、かゝる疑問は兎角に起りやすいこと故に、序に誌上で書續きの三絃閑話で我等の思ふて居るまゝを、愚答することにした。淨瑠璃は「狂言綺語」の内で、所詮、理窟に當て欲まるものではない、忠臣藏六段目の勘平が「腹十文字にかき切り、臍腑を摺んでしつかと押し」と文句にあつても、普通の切腹ならいざしらず、どんな武士でも腹十文字に切り割き物語まですると云ふことは出来まい。作者が勘平の氣概を誇張して書いた狂

言で、之を眞事しやかに語る太夫の眞劍味で、恰も眼前にその事實を彷彿せしめる藝力で、血沸き、肉躍る思ひを浮べるので、之が淨瑠璃の「狂言綺語」なのである、その語る淨瑠璃に、聲で作る描寫の模倣と、精神から沸く眞劍味（藝の正氣）との二通りがある、模倣の方は眞似る氣持から來た藝の技巧であり、正氣の方は、精神から滲み出た藝の眞實である眞の淨瑠璃はこの精神的正氣があつて、始めて語り得らるゝ藝道なので、模倣の氣持があつては、始めて語り得らぬのである。然るがゆへにこそ、玄人は精神の修養と、聲の鍛練が必要な譯で、玄人の太夫、三味線弾きは、子供のときから徒弟主義で願使せられ、薪水の勞をとり、師匠の肩を揉み、切嗟琢磨の精神的、肉體的の修行を積み、太夫に成れ得る見込のあるものに限つて、始めて大序を語らせられ、三絃の高調子で聲をせめられ、段々と聲に巾が付き、力量が出来ると今度は淨瑠璃の口と、巾とを永年間語つてゆく内に、自

然と技倆が備はり、聲が整ふて來るのである。この修行は丁度學生が、中學を終つて、高等學校に進み、大學へ入ると同様で、淨瑠璃界で玄人として身を立てるには、この修養の道程を歩み、不屈の研鑽を辿らねばならぬ。上手の素人から、玄人になつた人のことを樂屋中間では「化物」と稱して居るが、之は玄人のやうな修行をせぬから藝に實力が足らぬと云ふ、一種の通語なのである。舊劇の方は、舞臺上で、科と、姿と、型と、情とで看衆を得心させるために、臺詞の方は殆ど聲の摸倣と、技巧の程度を出て居らぬが、俳優としては、もと／＼聲の試練がして無いから、餘儀ないことで、太夫の方は正氣で鍛へて聲に活殺の餘裕が出來て居るから、聲で摸倣し、聲で技巧することを、邪道として極力排斥して居るのである、玄人も、素人もよくこの技巧と云ふことを穿き違へて居るやうだが、淨瑠璃道から云ふ技巧は、精神から出た技巧なので、聲で眞似たり、摸倣したりすることは、藝の胡魔化しであり、藝の破壊であるために、邪道と云はれても致し方のない譯なのである。

若い太夫や、素人の達者な人が、淨瑠璃の人物描寫を、精神で分けずと、聲で人物を語り分けをして居るが、之はほとんど考へ違ひで、淨瑠璃の物眞似をして居る譯で、殊更に目立つて惡い癖は、舊劇の臺詞を眞似て居る藝の臭さゝである、淨瑠璃も最早こゝまで墮落しては問題外で、眞面目に聴ひては居られぬ、淨瑠璃で語る詞と、俳優が舞臺での臺詞と

は、極めて瞭りと區分されて居り、別して淨瑠璃は、三味線との総合的音樂なので、詞にも、役者衆の臺詞と違つて、緩急、長短、序調、詞グセ、讀クセ、訛り、立詞、ツナギ、氣組、腹構え、其他に澤山の淨瑠璃の詞としての約束があり、規繩がある上に、詞そのものが、一種の音樂であることを知らねばならぬ。淨瑠璃節から精神的の要素が離れて、音樂的の規繩を取り去つたら、舊劇の物眞似と更らに違ひはないのである。

素人の多くは淨瑠璃の詞が、或る意味から見て一種の音樂であらねばならぬことさへも知らず語つて居るが、詞も、淨瑠璃の地合の接續であり、三絃の色と不離不即の間に建てられた、つなぎであり、この精神的解説の情味の詞は、(地合にして、地合にあらず、詞にして、詞にあらず)單り淨瑠璃節のみが持つ獨特の立派な音樂なので、昔から定めてある規繩を保有せねばなるまい、普通の地合よりも稍や高い調子に語るべき詞の約束(特種のもの別である)があり、地合の調子を脱線するのを、調子をはづしたと云ふ限り、詞で調子を脱線するのも勿論同様であるべき筈なのである。

淨瑠璃の詞を音樂として語つた太夫は曩には攝津大塚あり、現今では難聲の人なれど古靱太夫であるまいか。詞の點では男子よりも、女義の方が癖が多くて、嚴格に云ふたら、女性では眞の淨瑠璃の詞は語られぬと云ひたい程である。

淨瑠璃節が精神的の氣魄に缺け、舊劇化することを恐れ、

素人のために型や節の破壊されんことを惜んで、昔の大阪淨瑠璃因會は、規約によつて、太夫、三絃は舊劇の「チョボ」を語り、弾くことも嚴禁したほどで、素人淨瑠璃の木戸錢（入場料）を取る場合には玄人の三味線弾きの出演を禁止したが、この規約を無視したために、立派な三絃弾の幾人かが、因會から除名處分に遭ひ、數年間文樂座の出勤さへも停止せられた騒ぎがあつた、因會は淨瑠璃節が邪道に這入り、精神的藝道が墮落することを極力防止するための規約の實施であつた。

近來舊劇の俳優が、頻りに文樂の人物振りを研究し、津太夫、土佐太夫の古老に、淨瑠璃の人物描寫、時代物、世話物の對話上の自然味、詞の活殺、役柄に就ての情味などを研究に來て居ることを見聞するが、之に心付いた、菊五郎、吉右衛門其他の優は、流石に藝熱心の人であると感服して居る、舊劇ばかりは、淨瑠璃に基礎を置き、之を範典とせぬ限りは物にはならぬ、早い話しが、淨瑠璃を聴き慣れた耳で、舊劇俳優が舞臺上の臺詞を聴けば、呼吸は詰まず、間が抜けて、詞に隙が出來て、聲が徹底せず、上滑り勝ちで、感心して聽かれる人は幾人も居ない、（決して淨瑠璃のための我田引水ではない）新聞、雜誌の劇評では、あの優の臺詞は名調子である、この優の聲は自然を描寫して居ると推獎されて居るが、我等の耳には、何が名調子か、どれが自然の描寫か、實もつて合點がゆかぬばかりか、俳優臺詞の臭みを脱せず、大切な

自分の持聲の尊さを忘れて、態々と聲を殺して摸倣したり、作り過ぎて不自然になり、精神的に腹から出て居る立派な聲は殆ど皆無である。マア熟練された聲と云へば、近年では故人市川中車、今時では吉右衛門、友右衛門ぐらいなものである、昔の名優と云はれた人は聲のことでは非常に苦心した、いろ／＼の實話が遺されて居るが、今の若手の優は稽古さへも怠り勝ちとの評を聴くにつけ、淨瑠璃界も同様で、藝に凝る太夫のないことは情けない限りである。

大阪の生んだ名優故人中村鴈次郎がアノ悪い喫聲で、太閤記の十次郎、紙屋忠兵衛、新口村の忠兵衛、などの和事をやつて居て、あの惡聲が耳ざかりにならず、アノ濁つた音でゑも云はれぬ色氣と、聲の若々しさが出て居り、盛綱、由良之助でも、あの聲を更らに作らず貫祿と藝の品位を見せた力量、近來の名優故人九代目團十郎が、決して名調子の人ではなく聲で人物を摸倣せず、精神的の正氣の流れた生來の持聲で、其人の持つ自然の藝を味はして、看衆を得心させた其氣持と藝格は、淨瑠璃の持つて居る自然で作らぬ聲と些の變りはないのである。

自分に備はつて居らぬ小供の聲を無理に作つて見たり、老人の詞を舊劇の臺詞に眞似たり、時代物の武士の詞を相撲とりの詞辭の聲を出したり、高僧の詞が武士訛となつたり、娘と女房の詞を研究もせぬ裏聲専門で語つたり、かゝる考へ違ひは、淨瑠璃節の化物であり、摸倣から來る藝の墮落であ

る。要するに淨瑠璃は、精神から出た、藝の眞實であり、そして自分の持つ自然を淨瑠璃化することに努力し研究せねばならぬ。

故人大隅太夫も、今の津太夫も、耳ざはりは荒く、詞も、節も、「ブツキラ棒」に語つて居り、聲で、人物を描寫する風もなく、唯、大隅、津、自身の個性を活かして、自然の淨瑠璃を語つて居るので、そこに云ふに、謂はれぬ滋味と、餘韻がある、之が淨瑠璃の醍醐味であり、古典の匂ひである。

佛蘭西の音樂家が嘗て文樂座の人形見物に來て、故人越路太夫の淨瑠璃を聴き、自然の聲ではないが、非常に鍛練した聲だと批評したと聽ひて居るが、西洋音樂では其人の生來の持聲の良いのを美聲家として居るやうだが、淨瑠璃節から云へば、持聲にある惡癖を洗ひ落して、太棹に適合した音と聲とを作り上る譯で、腹から出る澁い「ニジツタ」音が自然に出て來るまでの修行は、普通一通りのことではない、聲帯から單調に出す聲と、腹力で聲帯を通じて發する聲とは、同じ高さの聲でも響き（聲の餘韻）に非常な相違がある、俗に淨瑠璃聲と云ふのは、この腹から出た聲を云ふので、淨瑠璃道での藝の修行は、恰も禪房で參禪の修行と一致したところがあり、淨瑠璃の三昧境は、自己を離れて藝の境地に解けこむことで、修行の結果で無は有を生じる譯で、即ち玄妙は悟りであらねばならぬ。素人としてはこの修行の方法は禁物であり、甚だ危険なことである、素人は矢張り生來の持聲で語る

べきもので、所謂、素人らしい垢ぬけのした眞面目さが藝の生命である、今假りに其危険さを假令で見れば、文樂座で素人出身の今の伊達太夫と越路門下である文字太夫、伊達は頗る美聲との評判で人氣もあるが、専門的の立場から云へば、寔に素人らしい持聲の所有者であり、淨瑠璃としては、其風味と餘情はどこにも認められぬ、今後堂々とした太夫とすべく本筋の藝を敲き込み、聲も勝手自由をさせず締めつけたら、淨瑠璃の方はある程度の上達すべくも、その反對にある持前の美聲は半減せられて、一般の聽衆からの、期待は裏切られて、人氣は墜落するであらふ。文字太夫は伊達の反對で、難聲の上に腹の極めて薄い太夫であるが、藝は率の無い語り口で、樂屋中間、一部の淨瑠璃通には喜ばれるも、營業者側の金儲けにはなり難い。淨瑠璃に隙がなくなり、呼吸が詰めば、精神的の藝の出來る程、美聲は段々と影をひそめて來るのを免かれぬ。

昔から名人、上手と稱された太夫は比較的に惡聲、難音の太夫が多く、美聲家と云はれた名人は古くて綱太夫明治になつて、攝津大椽二人くらいで、東京では朝太夫一人である。

東京の長唄研精會では、昔は拍手御免の張紙が出されて居つた、この注意は實に結構のことで、高座で懸命で唄ひ、娛むで、弾く氣分以外から雜音の這ひることは、唄ふ方でも、聽く方も、それがために心に破綻の出來るもので、丁度肝腎の話最中に電話の呼鈴がうるさく鳴り響くのと同然で、晝間

の電車の雑音は左程までにも氣にならぬが、夜半の警笛は、傍近の閑寂なために一層耳に立つやうなもので、音楽も静寂な漂ひのあるときほど、弾きにくく、唄ひ難く、反對に心は緊張して針の如く、次第に興奮がうすらぎゆき氣分が轉換して、藝三味の境地に入るべき際どき刹那に起る拍手が演者の耳底には恰も一電撃の想ひにて、藝の境地の碎ける譯で、この點に關しては、長唄も、淨瑠璃も更らに違ひはないのである。

津太夫が手習兒屋の松王の泣き笑ひに、精神的の氣魄が碎けたのもこの理由で、ハツと思ふ刹那に腹構へが抜けたので、流石の津太夫悠々としてあとは技巧の泣き笑ひを續けたまでと、かゝることは太夫としては、いくらでも、あることで、別して淨瑠璃の笑ひは、腹力が肝腎ゆへ、注意して聴けば誰人にもすぐ分る、三絃が太夫の稽古をするときに、その聲は腹にかゝらぬと詰責するのは、淨瑠璃の腹構へが不足することを云ふたのである。

出演中に聴衆から拍手が起き、私語が這ひることは、太夫としては恥づべきことで、腹構へが出来、正氣が漲つて居れば、拍手などが来るべき隙はあらぬ筈で、別して津太夫は、つなぎの呼吸で間を縫ふて語つて居り、地味であり、堅實な藝風、そこに隙の生じたことは、明治座といふ大劇場がたゞつた結果であるまいか、前號の人形淨瑠璃の舞臺装置で述べた通り、二千人も收容出來得る大劇場では、太夫、三

絃、人形遣ひ、三位一體の人形淨瑠璃には適合せず、廣過るために綜合的の氣組が互ひに碎け勝ちで、人間の持つ、腹力計りでは締めきれず、無理と矛盾だらけで、現今の文樂座として、先づ千人以内の劇場設備が適當で、繊細な語口は後方からは聴きとれぬために、それが藝の間隙となり、そこに拍手の來た譯で、云はゞ藝を知らぬ聽客が、通人が最良の引倒しであるかとも思はる。

昔し四代目市川團十郎が、悪七兵衛景清の役で、大目坊を殺して往かんとするを、松本幸四郎（五代目團十郎になつた人）の島山重忠が、呼びとめしも、景清は知らぬ顔して花道へ往くので狼狽した幸四郎は、三度も呼びかけても止まらず、當時の名優と云はれて居た、助高屋高助が傍で見かねて懸命の聲で、「景清まで」と呼びかけたが、團十郎の景清は、思はず立ち止まつて、後振り返へつた、後で團十郎に其譯を聴きしに、初めの三回は聲をかけても腹で止める氣合がなく、最後の「景清まで」は腹にびんと氣合がかゝり、眞に重忠の氣格が備つたから止まられたと答へたと某書に見ゆ、最初の三回は摸倣の心であり、最後の一回は腹から出た正氣の氣組で、淨瑠璃の呼吸も同様で、淨瑠璃は唯、精神から出る藝の眞實であらねばならぬ。

忠臣藏とその女性

昭和十四年十二月十三日電氣俱樂部に於ける名作淨瑠璃同好會にて講演

西村游史

假名手本忠臣藏は解説の必要が無いと思ふ程能く知られて居るが極めて大雑把に正史との比較と劇として上演當時の事柄と義士快擧の裏に隠れたる女性に就て話して見たい。

順序として赤穂義士の快擧を年代的に調べる必要がある。

先づ淺野長矩公が吉良義央を刃傷に及んだのは元祿十四年三月十四日(紀元二、三六一年今から二三九年前)復讐を遂げたのが翌年の元祿十五年十二月十四日(紀元二、三六一年今から二三八年前)義士の切腹がその翌年の元祿十六年二月四日(紀元二、三六三年今から二三七年前)である。義士の快擧を劇に仕組んだ最初は元祿十六年二月十六日江戸中村座で曙曾我夜討といふ外題で上演した、即ち義士の切腹後僅かに十二日目であつた、然るに幕府の注意によつて僅かに三日で其芝居は中止となつた。

その後文豪近松門左工門の作として寶永三年六月(紀元二、三六六年今より二三四年前)に碁盤太平記を竹本座に上演した、近松作の兼好法師物見車の續編として、高師直、鹽谷判官、大星由良之助等の假名を用ひてあることが假名手本忠臣藏の基礎的作品である、最近吉右工門や津太夫など此碁盤太平記を論議したなど相當關心を有するものである。

竹田出雲三好松格並木千柳は京都中村宗十郎芝居で大矢數四十七本の劇に刺戟されて直ちに著作して寛延元年八月十四日竹本座で上演した、それが丁度義士快擧後四十七日目である。

假名手本忠臣藏の外題は十一段目の義士の着た羽織の合印のいろはから取つたものであるが、義士の人數四十七人假名手本は忠臣の手本として内藏助の藏に因んで、四十七の

數字が一致して居る事に言ひ知れぬ大なる意味が含まれて居る、六段目に「徒黨の人数は四十五人汝が心底見届けたれば其方を差加へ一味の義士四十六人」とある、勘平を加へて四十六人、七段目に由良之助は平右工門に對し「兄は東の供を許す」と言明し居るから勘平と平右工門を加へて四十七人となる更に十一段目義士討入の段には「假名實名袖印其數四十六人なり」とあつて寺岡平右工門と切腹した勘平を加へて四十七人となるのである。

却説忠臣藏初興業には書卸當時の人氣は大したものであつたことを想像するのである。何となれば此劇が二百年近く今日迄歌舞伎や淨瑠璃の獨參湯と云はれて上演せられ劇場不入の場合は忠臣藏さへ上演すれば人氣があるのだから推して知るべしである、此劇の衣裳類は他のものに比して極めて粗末であるにも拘らず喜ばれ劇の生命が不朽であるのはヤハリ日本精神の根底に國民性が食ひ入つて居るからである。

竹本座に於ける初演興行は八月から十一月迄四ヶ月續いた、二ヶ月程経てから茲に大騒動が持上つた、九段目の山科の段は此太夫の場後に竹本筑前小椽となつた人——勿論七ツ目の由良之助は此太夫である、當時飛ぶ鳥も落す人氣人形遣ひの吉田文三郎が竹本座を背負つて立つて居る此の文三郎が此太夫に對して「先達而から申入れようと思つたがツイ言ひおくれたが打明けて相談したい事がある」と聞いて見ると九段目の大星が本藏に「兩戸をばづす我が工夫」を説明するに

當り「仕様を爰にて見せ申さんと庭に折しも雪深くさしもに強き大竹も雪の重さに云々」の所で文三郎が此太夫に向つて「見せ申さんと庭に折しも」の間を少し工夫して語つて貰ひたいと提案したことが紛擾の問題となつたのである、此太夫にしても「日數も過ぎた今日節地合等少しでも語りかへることは自分の藝術上斷じて相成難し」と主張したのだから文三郎も一反言ひ出し事後へは引けぬ門弟への聞えもあり面目が無い「見せ申さん」で立ち「庭に」で下駄をはかせ「折しも」にて竹の傍へと運ばせる段取が餘りに詰り過ぎて間が短い爲めに人形が遣ひ難いとの理由を述べたが此太夫が聞入れない爲めに更に文三郎は「一言でも人形は遣ひ難いだらうと云つて呉れるかと待つて居た位」との反感を持つて兩者相譲らざる爲めに竹田出雲は困り果て遂に協議の結果此太夫に休演を乞ひ後任者として豊竹上野椽に交渉して承諾を求めに上野椽は竹本大隅椽と改めて竹本座の座頭となつた、此太夫は委細に九段目と七ツ目の由良之助の語り方を大隅に引繼ぎした、大隅椽は七ツ目の掛合に院本が既に訂正して因としてあつたが元來初演は此太夫なれば因とあるは不都合である將來永久に残るべき院本である宜しく此を直せ」と書き直さしたといふ此太夫といひ大隅椽といひ實に奥床しい美談が今に残つて居る。

却説忠臣藏に於ける女性を解説するに當り一言述べねばならぬ事は凡ての事件の裏面には必ず女性のあるべきもので此

義士の快學の裏面には女性が潜んで居るものである、義士の實説に於ける裏面の女性と此劇に於ける女性とは各々異なる所がある、仍て茲に實説に於ける女性と此劇に於ける異同を附言したいのである。

忠臣藏に於ける女性は顔世御前、お輕、お輕の母おかや、戸無瀬、小浪、お石、お園の七人である。

序でに言ふが史實實説と文學藝術との關係區別異同に就て判然たらしめねばならぬ即ち文學は必ずしも史實と等しいものとはいへぬ文學殊に劇、物語、小説等は史實通りでなければならぬ事はない、平家物語、源平盛衰記、平治物語等が正しい史實とはいひ得ない如く平家物語からとつた一谷嫩軍記の熊谷敦盛の事や源平盛衰記から取つた六彌太忠澄と平忠度の如きも之を作り替へて嫩軍記には敦盛の身代りに熊谷の子も次郎直家を討つて居り忠澄が忠度を討たずして樂人齋が切つた事になつて居る如くこれは一例ではあるが多くの史實と文學や劇とは異なるものである。

忠臣藏の女性の顔世御前、お石、お園の如き實在の方々にして時代が違ひ劇として繼ぎ合せて多少の無理例へば顔世御前の艶書の拒絶の返事を鹽谷判官から師直に手渡しする所や技巧に過ぎた點も無いではないが大體に於て終始一貫自然の流れに仕組んである事が文學である、之を史實に照し合はすと非常に違つたものとなる、故に文學は文學の立場から史實實録は史實の立場から各異なるものであるから之を混同しな

い事が必要である。

先づ女性の第一は顔世御前である、顔世御前の事を話すには自然に鹽谷判官の事を話さねばならぬ、鹽谷判官といふ史實の人は元弘三年後醍醐天皇の隠岐にあらせられた時高貞を御召しになつたが應じなかつた、後天皇伯耆船上山に行幸の時官軍に屬した、尊氏の叛するや高貞は尊良親王に従つて尊氏と竹下で戦ひ後官軍に叛いて尊氏に歸屬した、高貞の妻顔世は後醍醐天皇に仕へた宮女で美人であつた、尊氏の執事高師直之を挑み應ぜざる爲め高貞を殺して奪はんとした、尊氏に讒して高貞は謀叛せんとした事を以てした、そこで高貞密かに遁れたが師直は尊氏に告げ人を遣はして之を殺さしめた、顔世御前は自刃した、日本女性鑑に顔世御前を貞女として後世に残つて居る。

忠臣藏は徳川時代の出來事を鹽谷高貞顔世御前高師直の足利時代に全部代へて來て居るので顔世御前は實在の淺野内匠頭長矩公の奥方瑤泉院の事としてある。

瑤泉院は賢夫人なりし事を茲に一言せんに元祿十四年三月十四日長矩公自刃の時弟大學が義姉瑤泉院に報告の時相手は何人なりしか其人は其場で相果てたかを御尋ねになつたが大學が答ふる能はず唯家老の報告を聞いて餘り騒がない様との事であつたとの事奥方は非常に憤慨され自分の兄様の不慮に際してその事を見極めてこそと思はれた時に年廿八歳であつた。

此劇の成立ちの一番根本の女性はこの奥方である其證據は澤山ある。

第一段目の大序兜改めは此顔世御前が義貞の兜を鑑定されたのである、又その時高師直が顔世にすり寄つて袖を控へ「直義公は我爲には結ぶの神」「吉田兼好の法師を師範と頼み歌道に志して居る」との戀文を渡して返事は口でもよいといふ顔世は驚くも其儘歸つたのは師直は夫判官の接判の師範なれば拒絶すると夫に當られる恐れがある。

第三段目鷺坂内が師直にいふ「かねく鹽谷が妻顔世御前はまだ殿へ御返事致さぬ由お氣にさへられぬ」師直答へて「主ある顔世度々歌の師範に事寄せて口説けども今に叶はぬ云々」鹽谷判官御前へ通る長廊下で師直が呼びかけ「遅し〜なんと心得て御座る今日は正七つ時と先刻から申渡したではないか」鹽谷曰く「成程遅なはりしは不調法さり乍ら御前へ出るはまだ間もあらん」と袂より文箱取出し奥顔世からと師直受取り「手前が和歌の道に心を寄するを聞き添削を頼むとある定めて眞事ならん」

「さなきだに重きが上の小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ」判官に恥辱を與へ雜言過言貞女で候の其許はあやかりの登城も遅はる筈の事、内にばかりへばりついてござる御酒機嫌かいつ酒を盛らした、井戸の鮒云々とある。

第四段花籠の所で顔世御前力彌など郷右工門「今日殿の御機嫌は如何お渡り遊ばさる」と申上ぐると此時九太夫と共に

來た。

顔世御前「オ、二人とも大儀〜この度判官様は氣詰りに思し召しおしつらひでも出ようかと案じたとは格別明暮樂山の花盛り御覽じて云々」「今度夫の御難儀なさるゝ元の起りはこの顔世いつぞや鶴ヶ岡で饗應の折云々」と顔世御前の述懐である。

ここに明暮の花盛り、日外鶴ヶ岡とあるが實録によると淺野長矩公が吉良上野介義央を切つて其日に切腹仰付けられたが御臨終には家來共一人も立會はれなかつた、九寸五分を腹に當てるや介措が生ぐに首を切つた、つまり史實は時間的にも劇と違つて居る四段目に由良之助が花道から來るが史實はそうではない。

要するに此劇の脚色は顔世御前が先頭第一に登場したのである。

お輕は實在の人物ではない、早野勘平は茅野三平である三平は獨身で廿八歳の時自殺したのであつて劇にはお輕といふ女性が勘平の妻としてある。(以下次號)

喪中に付年賀御遠慮申上候

黒川 叶

黒衣漫言を讀んで

— 三 五 郎 氏 へ —

齋 藤 拳 三

前號、三五郎氏の黒衣漫言を拜讀した、人形芝居に對する純眞な態度と云ひ、人形遣ひに對する健全な見解と云ひ全く敬服である。安藤鶴夫君の「人形價値の暴露」及び是澤九似廬君の「淨曲三絃閑話」と共に太棹初號以來の善き讀み物であつた。

私がかね／＼も少し世間に紹介したいと思つて居た二人の人形遣いの内先代桐竹紋十郎の事を書いてくれたのも嬉しかつた、吾々東京の出開帳より知らぬ關東人に大正十一年一月の越路の市若初陣に頭布の垂れを後へはね上げた黒衣の珍演出など全く初耳で嬉しい、御迷惑でなければ私の、も一人の人形遣い吉田多爲藏の事など三五郎氏に書いて頂ければ全く望外の喜びで有る、將に此の名論は私などより白井松次郎、大谷竹次郎兩氏の一粲に供へべきものであらう。私の人形芝居に對する絶望侮蔑的な態度に怒られて此の名論を生んだとすれば拙稿も意外の役割を務めたものと云ひ得る。拙評御一

讀を給つた事に深く御禮を申上る次第である。

私の大好きな岡鬼太郎氏の名の出たのも懐しかつた、私も文樂人形を黒衣にすべしとの意見を讀んだ最初は岡氏だつたと思ふ、たしか大正六年か七年の新富座出開帳を評したもので新演藝の八月號だと記憶する(三五郎氏は演藝畫報と云はれたが思い違ひではあるまいか)もし其れと同一のものだとしたら其れは岡氏には不似合な出来なもので元來岡氏は私などより數倍も人形には侮蔑的な人だから三五郎氏が再讀せられたら大いに怒られる事だらうと思ふ、話は少し脱線するが岡氏は院本通で有りながら一種の院本嫌いで、歌舞伎の「人形ぶり」反對と、「一日變り」反對の二つは終始一貫した主張であつた、「人形ぶり」反對の理由としては「人形芝居其ものが大して面白いものでも無いのに人間が人形の眞似をするのは愚劣である」との説であつた。

私は岡氏の劇評を非常に崇拜して來た一人だが人形淨瑠璃、

の批評はどうも餘り高く買へない。特に義太夫節三絃の評は可成出たら目、やつつけなものでたと思つて居る。此の點は三宅周太郎君なども買かぶつて居ると思ふ。

さて話は本題へ戻つて出遣反對の私が賛成論に轉向した理由を少し三五郎氏に聞いて頂きたいと思ふ。

人形淨瑠璃の本場の大阪人には此れを翫賞する點に於て東京の奴には眞の味は解るものかと云つた一種の侮蔑の氣持をもつ人がなか／＼多い、其の雄なるものの一人は故石割松太郎氏であらう。東京のシイ茸耳と眞向からやられたもので安藤鶴夫君などは可成、腹にすへ兼ねて人形も淨瑠璃を勉強したらしい。

其の點三五郎氏は少しも其んな氣分がなくて有難いが然し私は此れに對しては其う云はれても仕方がないと思つて居た。何としても東京の人形と義太夫はあまりに大阪より品物が悪過る、又私の知人○○氏の如き何年たつても餘りに人形も義太夫も解らな過る。

然し人形淨瑠璃の翫賞家としてはさのみ尊敬もして居ない石割氏から「三絃の調子も解つて居ない關東者に義太夫が解るものか」と一喝されてみると三業中最も難澁至難な三絃だけは、みつしり勉強する氣になつた。

然し又反對に大阪には眼をつぶつて文樂通いをする極端な人形無視の義太夫通も非常に多い、東京の馬鹿げた程の人形や人形遣いに對する人氣も其の反動として結構だと心ひそか

に思つて居た。

が然し三人遣いの人形はどうしても救はれぬ處までいつてしまつてゐると云ふ結論に私は到達した、其の理由を細説する事は雜誌太棹の爲にも取りたくないし亦私自身としても筆にするのも本意ない氣持ちであるから省略する結局私は年一、二回の東上を樂む東京の文樂人形のファンの一人として榮三、文五郎等の在世中彼等のあらゆる役々を見つくして人形芝居の決算報告としやうと云ふ甚だイビツな翫賞の仕方になつてしまつたのである。だから人形の事は私より小泉蛙鳴君や安藤君の方が適任でもあり亦正格で面白い、私が感銘の少ない人形を主にして書く様社主から御下命のあつたのも前記の二君が多忙で寄稿出来ぬのと淨瑠璃を主にした評は造詣の深い是澤君に書かせる爲だつたのかも知れない。

一昨年の明治座の出開帳に榮三の師直は大序が黒衣故に代役であつた、彦山の八ツ目杉坂墓所は一言も口をきかない斧右工門の母すら出遣いにする東京流故に榮三の六助が見られた、此の二つの事實は私に三日變りの東京出開帳を全部黒衣にしたら老齡の榮三、文五郎には三役以上も持たせてお園はサワリだけ、熊谷は物語りだけを二人に遣はせはすまいかと云ふ甚だ不吉な餘感がして來た、これがあの暴論の根元である。

榮三、文五郎代役の場合に代役の藝を深く觀察すればたりるとは全く御説の通りで、結構であるが、私には必ず榮三、

文五郎以下、或は及びもつかないのが出来上つてくる心配の方が、より強く心にうかんで来る。

此所まで来ると始めて文樂を見る金ボタンの學生などには私の最負の榮三、文五郎の顔さへ見せておいてやりたい様な氣になつてくる。

三五郎氏よ貴下はさぞ悲しむでしやふ、東京では人形研究の爲にたつた、南北座さへ全部出遣いをしていますよ、貴下が藝に生きる名人級の大立者の文五郎は、藝者の清元や長唄の地でいゝ氣持ちそうに出遣いをしていますよ、人形芝居の正しい研究家三五郎氏よ、真正正銘の榮三、文五郎と見定めなければ批評が出来ないやうでは心細い、なんて叱らずに何卒貴下のお好きな先代紋十郎の左遣いとして一生を黒衣で終つた左遣いの名手玉龜のやうな人の逸話や傳記を供養の意味でどうか御書き下さい、是は關東人にははたくても出来ぬ事です。京—阪數百里を隔て、玉稿をお待ち致します。

謹 賀 新 年

野 澤 勝 平

大阪市北區曾根崎新地二ノ五
電話北一三五八番

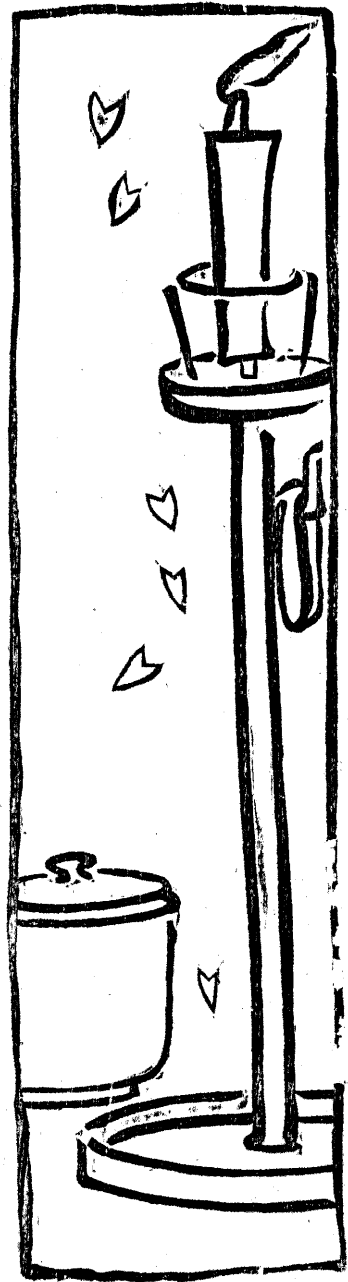
謹 賀 新 年

柳 有 明

歸 山 歸 世 花

久 保 田 喜 鶴

波 多 野 三 樂



女義昔話

(上)

岡田蝶花形

名古屋の生んだ女義界の大御所豊竹呂昇遊いて既に十年（昭和五年六月七日大阪にて死去、病名狭心症、享年五十七歳）去るもの日々とうとしとかや、今の青年の間には呂昇の呂の字さへ云ふものはない。又明治二十年頃から大正の初期にかけて女藝人の頭梁としてもはやされ、その初高座の時には一枚繪の錦繪として繪草紙屋の店頭にかざられて當時の

青年否國民全體から渴仰的であつた初代竹本綾之助は現在東京市世田谷區松原三の九二二番地に「石井その」として六十六歳の高齡を保つてゐるが、今日誰一人として振返るものさへもない。

寶塚、松竹の歌劇女優が若い男女の關心を蒐め、繪葉書屋で賣れるプロマイドの數がキネマスターのそれを遙かに凌駕

してゐる今日、今更女義太夫（たれぎだ）でもあるまいが、それでも今日の歌劇スターの人氣と雖も、その昔の女義太夫の全盛とは到底比すべきものではない。青年達が掛け持ちに



急ぐ女義太の俵の後押をし

たが、この一夜二軒パネと

いふのは人氣のある落語家

竹もやるが、その起源は實に

初代竹本綾之助がはじめて

呂作つたのだ。又失戀の結果

自殺したものが澤山あつたと云ふ其遠い昔のことはい

さ知らず、筆者が明治の終

時頃の女義の印象を、その當

時の思ひ出として些か述べ

て見やう。尙大正二年から

大正六年まで筆者は京都帝

大醫學部に入學したが、そ

綾の間の事は又別に書くとし

て、ざつと人名だけ付け加

へて置く。

助 十年を一昔と云ふなら明

治四十年代は正に四昔前で

ある。その當時の昔を懐ひ出せばなつかしさがこみ上げて來る。その頃は何と云つても女義がまだ全盛であつた。明治の終には未だ活動寫眞などには今日の如く學生は行かなかつた。講談、落語、浪花節と云つた類の寄席が盛んであつたが、その中でも女義太夫の盛んであつたことは今日から見るとまるで夢のやうだ。現在では女義の席と云ふものは一軒もない。（時々月の内の何日か興行する東橋亭と、義太夫座の



駒若を除いては）之に比べ

ると、兎に角明治二十年頃

からある睦の六軒として知

られた有名な義太夫の定席

宮松、若竹、東橋、大

昇、新柳、立花の六軒を主

として、（その他五十六軒

あつたさうだが）尤も此の

中、明治四十年代には新柳

亭はなく、大るじも定席と云ふわけではなく時々色物のかゝる席に變つたし、若竹も色物となつて居たが（今ではない）その代り定席として兩國に二州亭、西片町に鈴木亭、芝に琴平亭などが現はれ、その他立花家、祇園亭、忍岡演藝館、川升亭、金柳亭、七大黒、常盤、廣瀬亭、江戸川亭、二山亭、巴館、上萬亭、市場亭、山市場、入道館、廣市場等屈指の出

來ぬ位に女義太のかかる席があつた。

私の聴き始めたのは既に全盛を極めて居た昇菊昇之助の姉妹の引退して了つた後の明治四十四年の暮頃からである。その頃女義には二派あつて、



竹 陸派は宮田甚太郎、正義派の方は山田屋廣吉がその世話をしてゐた。これを五厘と云つたが、五厘と云ふ名稱は入場する客の一人につき五厘を世話料として收得することに基いてゐると云ふ事を聞いた。



その横綱の初代竹本綾之助は明治三十一年七月に現在の夫君石井健太氏と結婚の故を以て一度引退したのであるが、前述の通り兩派に別れた女義界の仲裁を目的として花々しく明治四十一年に立花家へ再勤して以來、大正六年には一門を率ゐて藤菱會を組織したが、事遂に志と違ひ兩派を全く合同することの出来ぬうちに大正十四年に全く引退して了つた。その全盛時代には今の交通巡査のやうなものが出て、木戸口に

ひしめく群集の整理をし、午後三時の開演が午前十一時には既に満員客止めとなつた位である。その綾之助の秘藏弟子として綾菊とかほる(後に綾香と改名)とがある。此の綾菊には南部さんと云ふいい人があつたが、そのチャームのある點抜群で、義太夫の外道かは知らぬが當時若い人々には頗る受けたものだつたが、不幸肺を病んで大正六年に若くして世を去つた。得意は二十四孝だつた。綾香はまだ若かつたが、新口村等を得意として、丸々しい顔なり姿なりが多くの人の好感をひき、帝大の學生に想ひつかれて今も小山田法學士夫人として幸福な目を送つてゐる。久し振りに



竹 圓 月 子 竹 本 竹 田法學士夫人として幸福な目を送つてゐる。久し振りに先年竹本靜香(綾香の弟子で若くして逝いた)の追善會で逢つたが水々しい夫人

振りではあるが、然しそのかみの豊艶さほう己に失はれてゐた。其後昭和十四年八月二十七日我十二回素玄淨曲研究會で十種香を語つて一同に好感を興へられたが年はさすがに争はれず聲量にこそ衰えはあつたが、流石に昔が偲ばれた。相玉も現存してゐて、時々歌舞伎座などで女義大會などのある時姿を見せるが、その當時から既に切前語りの中老として相當の年輩と思はれたのに、現在見てもまだ若いものがある。

月子は昔は竹園月子と云つて、小磯を得意とした女義であつたが、今は男義猿之助師の夫人として納つてゐる。大正二年の夏筆者の京大へ入學する送別會を松本楼で催した時新橋の藝妓として座に出て呉れた思ひ出もある。先日その娘を見たが往年の月子の姿がしのばれてならなかつた。

美光はその頃から押し出しのいい美人だつた。此の人ははじめから眞打だつたやうな（誰でも一足飛に眞打になるものではないが）氣がする程、



竹 筆者の聞き始めた頃から女義界に嚴然として、聳えて本 ゐた。その美光今や大阪心齋橋の萬久小間物店のお家はんとして、多くの子女のよき母となつてゐると聞く光 のは嬉しい。

同じく朝重も當時の大關としてさわがれて居たので、友人（當時一高の生徒で今は某倉庫會社の大阪支店長であるM法學士）の如きも彼女の得意中の得意湊町が、今晚の語物として新聞に出ると、きつとどんな遠くの席へでも出掛けたと云ふ位だつた。その朝重は夫君たる猪股文學士の爲めには當時からよき妻として常に貞淑を盡した事は知る人ぞ知る。その猪股君が臺灣の某州で警察部長を勤めて居た頃、ある日東京から女義の一座がやつて來た

が、日頃細君の前身を秘して居る手前正面から入場するわけにも行かず、小屋の裏に立つて洩れて來る淨瑠璃の節々に耳を立てて聞いて居たのを、



豊 巡查が此奴怪しい奴とばかりつかまへて明るみに引張つて來て見ると、こはそも如何に部長殿だつたのに、

太 當の巡查も部長殿も共々恐縮したと云ふ話は相當有名だ。その猪股君はその爲めかどうかは知らぬが出世して退官後は臺灣青果の取締役として玉川奥澤あたりに住んで居たが、今は復臺灣に行つて居る。



本 伊達玉は伊達太夫の弟子で紙治を得意とし、團雀、組（今の團雀とは違ふ）春瀧いづれも肥満の女で可もなし不可もなしと云ふ處。組幸は、大關として陸の大看板、

そのしつかりした藝風が一般に認められて居たので決して美人で人氣があつたのではない。合邦が最もよかつた（つゞく）

ヲチオ 浄曲漫評

金王丸

東京床語

〔十一月十四日〕

義經千本櫻

すしやの段

絃 竹本鏡太夫
鶴澤市作

土佐大夫の門下に列し、文樂中堅を以て研鑽數年、事志と違ひてか再び元のチヨボ語りに逆戻つた斯界の俊銳鏡太夫君、久方振りの放送である。堂々たるアノ體驅から絞り出す豊富な聲量、何でもいける達者藝。撰まれた藝題は、千本のすしや、神ならぬから繩付、まで。内侍に今一つの品位と、彌助に今一息のふくらみとが欲しく「このおつむりは……」あたり、あまりに拙かつたは、どうしたものか。お里のさはりは存外の美聲で、可愛く出來たが、權太が飛出してから、父親や母親を呼び立てる大事の所で、聲の出どころが低過ぎて娘にならず。梶原

の出からは、コツチのものとはばかり、大きい所を充分に聴かせたが、氣のせいかな危ふく芝居になる所が多く、ヤリトリにイキの詰まらね難が多分にあつたは残念であつた。因に例の『私は里と申して』とおの字を言はぬはよかつたが「たとへ焦れて死すればとて……」と語つてゐた。絃の市作とやはは、初めて聴いたが、中々調子の良い三味線で、勿論邪魔もせず、よく灸所を押へて弾いてゐたのには、失禮ながら感心した。

大阪女義

〔十一月廿一日〕

菅原傳授手習鑑

寺子屋の段

源 藏 豊 竹 團 司
戸 浪 竹 本 清 糸
千 代 竹 本 雛 昇
松 王 竹 本 綱 龍
絃 豊 澤 小 住

年	新	賀	謹
			竹本津太夫
		豊竹古靱太夫	

大阪北陽演舞場からの中繼放送であ
知らぬが、放送では大失敗である。

大阪女義 〔十一月廿八日〕

伽羅先代萩 政岡忠義の段

竹本三蝶
豊澤仙平

たものか。最も困つたのは、團司の源藏
で、美聲の節語りともいふか、言葉の
口先だけで、ペタ／＼／＼／＼する、恐
ろしく聴きづらいもの、これが先づ全體
をおもしろくないものにしたのではある
まいか。綱龍の松王も、例の泣き笑ひ
に、ちよいと巧いなと思はせたゞけで、
甚だ氣の抜けた感じのする演出であつ
た。先づ中でよろしかつたのは、雛昇の
千代であらう。いろはおくり、も互ひに
譲り合ふといふが、探り合ふといふか、
この中の誰れでも、一人語りの方がよ
ほど好いものではなからうか、要する
に、カケ合といふものが、斯くの如く、
寧ろダランの無いものにしたといふのが
當つてゐやう。演舞場内では受けたかも

我等不敏にして、三蝶嬢は初耳なので
あるが、大阪の女子部でも相當な顔の人
であらう。先代の御殿は、奥の、榮御前
の出からであつた。段切に近づいての、
礎ぞやからの政岡のクドキは、さすが
に、それでも擒從自在、とまでは行かな
かつたが、普通ザラに聴くタレギタと
は、一步進んで、考へられた演出で首肯
した。處が、我等は、この御殿の奥は、
八汐で聴かせるものと心得てゐる位のそ
れが、榮御前と八汐と同一列の意氣であ
つたのは、大の不服で、もうそれだけ
で、餘程、今夜の先代は點が落ちるとお
もつた。八汐を今一つも二つも強く、大
きく張り切つて貰ひたかつたのである。
でない」と全體に於て、此の劇——イヤ此

謹	賀	新	年
竹本鍛太夫			豊竹呂太夫

の場面の規ひが外れる譯である。仙平さんの絃は結構であるが、どうやら、中途まで、御兩人のイキが合はず、所謂イタに付かぬとおもはれたのはどうしたものでか。

大阪女義 [十二月五日]

夕霧阿波鳴門

吉田屋の段

絃 豊竹昇之助 豊澤力松

他の演藝種目なら、毎月のやうに出る人も珍らしくないが、義太夫で、年に三度はちよいと無いやうだ。昇之助さんは、今年の五月に寺子屋を語り、八月に、さはり集として、現はれ、今度又た吉田屋といふ事になる、BKの重寶藝人ではある。處で、誠に以て申譯ないが、金丸障はる事あつて、同夜も實は聴き洩らしたのであつた。女義として、殊に美聲の昇ちゃんには、恰好な語り物、聞き直つて云へば、難かしい近松ものではあるが、『冬編笠の赤はりて!』の、出がどうだつたか、奥へ來て例の夕霧のさはり、唯た譯もなく、本人好い心持の、聴者も相當嬉しがつて手を叩いた事だらうと思ふ。

文樂中堅 [十二月十二日]

新作『南部坂』

食滿南北作

竹本相生太夫

絃 八雲鶴澤清友

大分、チラホラ義太夫の新作が現はれ出した。結構な事である。だがしかしだ。それ又た金丸の毒舌かとおぼしめさうが、全くの話して、名物にうまいものなし、といふのが、新作に好いものなしである。この『南部坂』は默阿彌の戯曲を書き直したものださうで、そして、相生師と清二郎君の御兩人の作曲になるものといふが、大した曲節なく、芝居で言へばト書程度のものであつて、それはまアそれでよく、相生師も、どツしりと、大分聲巾も出て近頃、藝を上げられたのは、我等も認めるし、清ちゃんも中々よく手が廻つて、無論前途有望の青年三味

謹	賀	新	年
竹本南部太夫	鶴澤道八		

弾であることは確かになつた。唯だ、この「南部坂」の一段、筋をよく知つてゐるから譯がわかるが、だしぬけにこれを聴かされて、大石の苦忠や、一角の出現などが判る人があつたら、手を上げる、である。譯の分らぬ點ばかりでなく、その面白さに於ても、現にある人に、雲右衛門の南部坂の方が好いね、と不用意に評すると、その人は、雲右衛門でなくたつて、アレよりは面白いよ、と言つた。無論浪花節以下であつた事は確かである。

▲訂正 前々號本漫評、駒太夫氏の肩書に『文樂中老』とあるは古老と訂正します。

高座は「かたる」
待合では「うたふ」

—(三九氏へ)— 岡田蝶花形

義太夫は語るものとはよく知つては居ますが、高座即ち師匠の絃で語る時は當然「かたる」で、待合又は料理屋で藝者の絃で都々逸の間に演ずる時は「かたる」といふと義太夫の先祖へ申譯なく、

口先で「うたふ」といひたい氣分からで歌は氣分を現すものですから函館の若柳は待合、札幌の東京庵は料理屋であり、一寸サワリを一つといふ程度で藝者の絃だつたからわざと「うたふ」といふたのです。但し待合でも富士見町の新みよしの如く舞臺の處るところで先年廣助の絃で語つたり女義團秀の後援會を催して語つたことがある、その時は當然かたるといふ歌をつくりまます。

「ある時は語りある夜はうたふなる旅につきものゝわれの淨瑠璃」

謹 賀 新 年

貸 席 並 木 俱 樂 部

淺 草・雷 門
電話淺草一二三五番

義太夫席として皆様のお氣に召す俱樂部で御座います。
乗物は電車・バス・地下鐵いづれも雷門下車直ぐ近間でございます

謹	賀	新	年
豊	澤	廣	助
鶴	澤	清	六

河野國聲氏の『堀川』

内田 富太郎

どんよりと曇つた蒸暑い眞夏の淺草の松屋ホールと、うら寒い冷氣が街に立籠つてゐる冬の夜の電氣俱樂部の講堂とで、河野國聲氏の「堀川」を合せて二回聴いた。そしてつくづく國聲氏の「堀川」は良いものだと思つた。

云ふまでもないことだが「堀川」は世話物中の世話物で、この曲に描かれてゐる優麗な情趣には、心境的な滋々とした情愴が籠つてゐる。

國聲氏の「堀川」は繊巧で、なめらかな艶と潤ひを漂はせ乍ら、細緻に情韻的に陰影をふつくりと描き出す、圓味のある柔軟性が全曲に行き届いて心情的な氣品が渾然と籠つてゐる。

與次郎が特に傑出してゐて一寸菊五郎を思はせる、心理的な深い行き方で誠に佳良だ。玄義素義を問はず、與次郎の人物表現は多くの場合ともすれば、臆病で單純なお目出度い人物として語られ易い、それが餘りに誇張され過ぎていささか哀れ味を薄くしたり、妙にアクの強い泥臭を感じさせて了ふ。殊更に與次郎を「素頓狂な可笑し味を共つ痴呆に近い愚人として表現したり、

意識的に陽氣に浮めて語つたりする、語り口はこの曲の本質に添はない遣り方だと思ふ、母想ひで小心な善良無比の好人物が持つ「うとましい」哀れさでありたい。

國聲氏の與次郎は「母に案じをかけさせぬ……」と心を砕く表面陽氣のやうでその實心に寂しく、己が非力をかこちながら母と妹お俊に心をつくす、思ひやりの深い好人物として巧緻に表現する、善人のみが持つ純粹な深いやるせなさがしみ／＼と滲み出て、津太夫風な枯淡なじつくりとした錆はなくとも實によい與次郎である。

後半の猿廻しも繊巧にツボをよく擷んでいたずらに騒々しくなく心で唄つて泣いてゐるやうな眞情的な切つなさが流れる。與次郎に次いでお俊が優れてゐる。國聲氏は聲に潤ひと艶があつて人物としては女性表現が一番巧い。なめらかな柔軟性がしつとりと流れてこそつかずにつつくりとお俊の哀情を浮彫にしてゐる、役者で云へば故梅幸より若き日の歌右衛門を想起させる。

「アイと返事もしほ／＼と思ひ惱みし顔形」でせつなく沈むお俊の死を覺悟した心をしつとりと、描寫して行く聞く程迫るお

謹	賀	新	年
鶴澤寛治郎	鶴澤重造		

しゆんが胸」を詩情豊かに語つて哀愁の影を漂はせる。「母の心と兄の詞勿體ないと思へども切るに切られぬ胸の中」が云ふに云はれぬやるせない心を深く哀れに出す。

お俊はこの三ヶ所が巧いといふと引立つ「心はそうじやないじやくり……から」そりや聞えませぬ傳兵衛様「へかけては氏獨特の圓味のある柔軟美がしとくと、聽客の胸に迫つて來て充分樂しませる。

與次郎の母は盲人になりきれてゐて、詞が目明きにならない處が本格だ、おつるを稽古する邊り、洗練された寂し味が漂つて餘情深い。「あの面白さを見るにつけ……」

の二上りウタの邊りわびしい盲目の老師匠と夢多い稚拙な小娘との對照がクツキリと内面的に語られてゐて深鮮だ「鬼は冥途に有るものを……」の述懐も充分突込んで核心に觸れる眼目の「子故の闇にわきひら見ず……」は淡々とキメのこまかい陰彩が精緻に籠つてゐて深く傷へ込み込むやうな迫力はなくとも老母の親情を哀れに脈々と漂はせる「目は見えれども見送る母……」の段切れをしつとりと豊富な聲量で潤ひを持つて乍ら内面的に語つて美しく哀れな詩情を流露させた。

結局國聲氏の「堀川」は緻巧に心理的に語り乍ら、理智的な鋭角性に情態をうすめられずに、切なく哀れな風情を掘下げて表現する深味があつて樂しめる一段だつた。

淨曲としてこの「堀川」は實に曲全體にしみんとしたまごころが側々と流れてゐる命をかけて一筋に傳兵衛を思ひつめいぢらしいお俊の眞心、母を大事と貧しい中に孝養つくす與次郎の眞實心、浮世の義理をかみしめていとしい娘を心中に合點してやる老母の眞情、そのいづれもが渾然一體となつて、夕餉の煙りも薄くたなびく佗しい堀川の里に母子兄妹愛人のまごころの悲劇が抒情的に切なく繰り擧げられて行く情趣深い一段である。

殊に作者がお俊の眞心を表現する描寫は哀切であると共に非常に大膽だと思ふ例へばお俊は現在親兄妹の目の前で「世話しられても恩にきぬほんに女夫と思ふ物大事の」夫の難儀命の際にふり捨てて女の道が立つ物か不孝共悪人共思ひあきらめコレ申し一所に死して下さんせ……と傳兵衛へクドキ立ててゐる。

肉縁の前でこれほど大膽に戀の告白を切々と訴へてゐながら、聽客に少しも不快や嫌惡の情を興へてゐない、それは義太夫藝術特有のさわりの妙調による音楽美にもよるけれど、生命を賭けたお俊の深いいぢらしい淨化された眞心が蘇々として聽客の心の琴線に觸れて行く爲めであるまいか。

お俊の深い眞情を把握した名描寫はどこか近松門左衛門の傑作「何時なん時を最後ともその日送りのあへない命と哀切にくどき泣く河庄の小春や」金故大事の忠兵衛さん科人にしたも私から……と雪中に嗚咽する哀艶な新口の梅川の風情を感じさせられる。

謹 賀 新 年

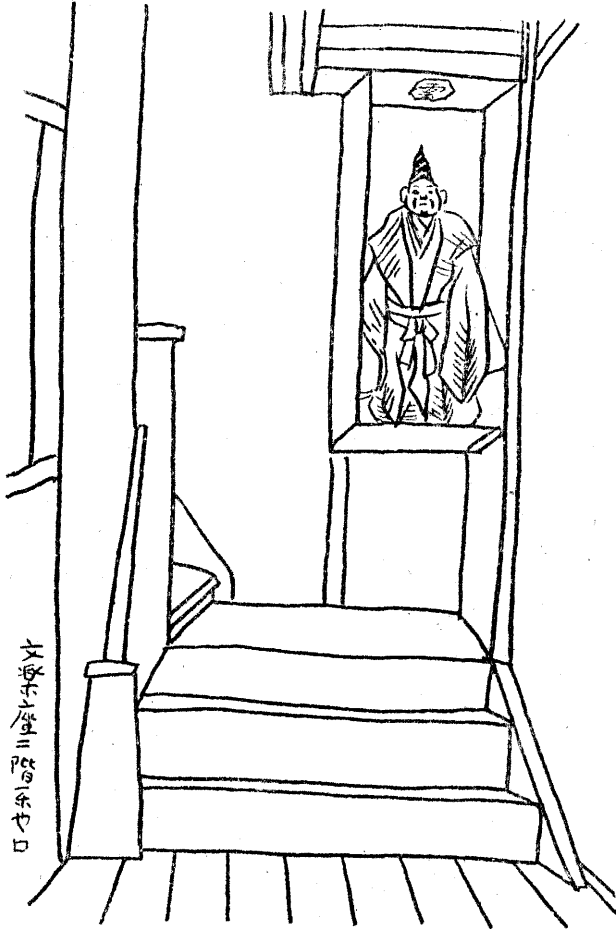
桐竹門造
乙女文樂

桐竹紋十郎

文樂樂屋圖譜

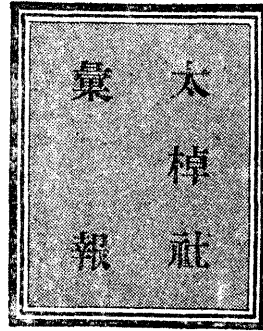
—をげし尾宮—

文樂座の樂屋の二階の上り口の隅に、三番叟の人形が飾つてある、三番叟の人形は、開幕三十分前に必ず演ぜられるもので、芝居傳統のすたつて來た時世に、文樂のみに残されてゐるのは劇史上貴重な存在である。祝儀人形であるので、他の人形の様に廊



文樂座二階一系ヤロ

下や部屋中に置かないのである。人形遣ひは必ずこゝで一禮して各自の室へ入る事になつてゐる。座頭の榮三が地方巡業の際は、衣装係の玉七老人の室に飾り置く事が定りになつてゐる。



千里淨風・萬里同風の旗をかゝげ 淨瑠璃同風會の結成

昨秋「批評する會、される會」を組織した河野國聲氏は、同會が非常なる好評を以て迎へられたを機に、同好の士と圖り、帝都の全淨曲人の一大團結たる會の達成を企劃し、高瀬操氏が『淨瑠璃同風會』の名付親となり、各部委員諸氏の努力に依て安産も安産、忽ち舊臘中に何んの苦もなく恰も順風に帆をあげた如くに空前の一大團結が成立された。

明くれば皇紀二千六百年、此の芽出度年を壽ほぐと共に、一月十三日午後六時より九段軍人會館大宴會場に於て盛大なる發會祝賀會が催ほされた。これより先き、全會員は當日午後一時宮城前に集合することになり、雲の如く參する帝都素玄の人々無慮五百餘名、保坂有曲、中澤巴氏の誘導にて宮城中央前に進み、中澤氏の號令にて最敬禮、默禱、

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

— 記者 —

謹賀新年

料理は關西の板前、一流處に負けぬといふ腕き、サーピス女中の中には義太夫の上手な三味線弾きが二三人も居ります。

何卒

御引立の程を

九段・俎橋畔

關西料理 円 六

電話九段四〇〇六番

君が代二回、萬歳三唱して遙拜を終り、次で河野氏は同風會の發會を宜して茲に芽出度發會式を終了。それより隊伍堂々會旗は皇居の神風に翻へり櫻田門を出で、貸切電車二臺に分乘の上明治神宮、靖國神社を巡拜して一先づ解散。(明治神宮にては日本義太夫因會々長豊澤猿之助、靖國神社にては中道素鶴氏の號令にて最敬禮、默禱宮城前と同じ)

此日絶の好淨曲日和に花も綻るぶ陽氣を示し、解散後は各自九段の夕陽を浴びながら漫步、宴會場に當てられた九段下軍人會館に集り、定刻午後六時より祝賀の宴に移り、大用大嘉津氏の案にて參會者一同より獻金を募り、賛成賛成と立處に約五十圓を都新聞社を通じて獻金し、酒中三分間テブルスピーチに祝詞或は感想を述べ、終りに大阪より遙々東上出席した鶴澤綱造氏のいとも有益なる淨曲談に一同傾聴し、歡談つきず、東都五十義會長細川清氏の發聲にて同風會萬歳を三唱し和氣霏々裡に散會した。

なほ又引續き十四日正午より日本橋

俱樂部に於て、左の番組に依りその發會披露義太夫大會が催ほされ、素玄義登場の時間には中澤巴氏の號令にて宮城に向つて前同様の最敬禮、默禱、河野國聲氏の發會宣言、高瀬操、星野桔梗、保坂有曲氏の世話人代表の挨拶、これに次いで豊澤猿之助氏を始め多數諸氏の祝詞があつて、立錐の餘地なき満場からは萬雷の如き拍子手送られ、實に前代未聞、空前絶後の壯舉であつた。

開會の辭(中澤巴)壽式三番叟(千歳、子太郎、翁、武市。三番叟、湊)絃(猿三郎、ツレ、延左衛門、絃、猿藏)合邦(國聲、猿三郎)酒屋(桔梗、辰六)饅頭娘(操、道之助)引窓(有曲、猿平)忠四(旭、道之助)安達(松寶、團八)鮎屋(清、道之助)太十(千鶴、猿平)……休憩……淨瑠璃同風會發會披露(素玄義登場、紀元二千六百年慶祝、聖恩奉謝、皇軍感謝、同風會創立披露、發會人挨拶、祝辭其他、萬歳三唱)休憩……車引(時平、操。松王、貴昇。梅王、都昇。櫻丸、子太郎。杉王、市菊)絃(和

謹 賀 新 年	
箱根強羅溫泉 茶代 廢止 觀光旅館 電話(團)一六〇番 宮ノ下(三)一一番	鶴卷溫泉 小田急線鶴卷溫泉下車 光 鶴 園 電話伊勢原一一番
眺望 絕佳	宿泊料低廉

孝)陣屋(關路、辰六)玉三(素鶴、龜太郎、三幸。彌五郎、紅司。喜太八、關造)伏見の里(清華、觀西翁)志度寺(どくろ、司好)宿屋(美峰、猿之助)寺子屋(文久、猿平)先代(巴、猿藏)忠(猿之助)閉會の辭(星野桔梗)なほ次七(由良之助、光樂。力彌、子太郎。重回催は二月十九日、會場は日本橋俱樂部

名作淨瑠璃同好會

名作淨瑠璃同好會は、既報の如く舊臘電氣俱樂部に於て忠臣藏の通しを上演頗る好評を博したが、今春早々近松傑作集として、博多小女郎浪枕(元船より柳町)心中天網島(河庄、紙治、(蜷川、大和屋)日本振袖始(素淺鳴導道行)傾城反魂香

(虎の段、吃又の段、大津繪合戦の段)廓文章(吉田屋)を上演し、王華、宮古、子太郎、淀橋、愛氷、忠二氏の外に桔梗、かなめ、平茶、八雲、有曲、福笑氏等が助員する事になつた。

第四回 九阜會

豊澤鶴助師主催の淨曲九阜會は、三越ホールにて一月十七日午前十時より池田三國氏の南北座人形入にて開催。

三番叟(座中)阿漕(櫓、鶴助)太十(美福、素昇)酒屋(義昇、扇之助)瀧(浪六、鶴助)縮屋(松玉、松四郎)堀川(阿津滿、鶴助、ツレ、美之助)

淨曲無名會

一月十八日午後四時開場、丸ノ内電氣俱樂部に開催。保々長平氏は上海へ旅行せられ當分休演。次回は二月十五日。

壺坂(桔梗、綱助)本下(國聲、猿三郎)安達(操、道之助)山名屋(どくろ、司好)野崎(美峰、猿之助、ツレ、延左衛門、松四郎、美之助)

素玄淨曲研究會

十二月五日午後六時より、第十六回を神樂坂相互俱樂部に開催。

廣助師をめぐる研究座談會を催ほする事になつたが、第十七回は左記番組に依り

柳(蝶花形、良造)岸姫(游史、團市)長局(貴昇、猿藏)忠六(佳仙、仙照)

一月廿八日午後六時より、神田キリスト教青年會館で開催。

尙同會は一月廿六日午後五時より有樂町「大和田」に於て新年會を開き、豊澤

太十(大えい)山姥(子太郎)紙治(雅樂)寺子屋(廣助)

綾 秀 會

十二月三日喜久本會館に同四日駒形俱樂部に開催。

(三日) 十種香(彌樂) 宿屋(綾登)
 先代(治光) 蝶八(八雲) 柳(壽光) 安八(八雲) 宿屋(花柳) 安達(壽瓢) 絃達(壽瓢) 絃(綾秀)

日本義太夫因會

女子部新年大會

昨冬役員改選をした日本義太夫因會女子部は、年改まり茲に改選後の第一轟として來る一月廿二日午前十一時より日本橋俱樂部に於て、左の番組に依り新年大會を公演する事になつた。(語り順は抽籤)

野崎村(久作、昇登、お染、光助、母親、駒龍、下女、駒鈴、久松、猿春、お光、團雀) 絃(清三、ツレ、清二、津賀昇、仙照) 又助(佳仙、仙照) 佐太村(染登、網昇) 沼津(彌昭、駒清) 十種香(駒龍、津賀昇) 酒屋(小津賀、紋教) 中將姫(佳照、清一) 山名屋(越駒、紋教) 日吉(素八、猿昇) 柳(住若、清一) 先代(越道、巴住) 鰻谷(素昇、猿玉) 陣屋(猿春、三生) 壺坂(光助、清二) 安

達(駒鈴、駒清) 新口(巴駒、巴住) 宿屋(素廣、猿昇) 合邦(彌周、三生) 鰻屋(重子、勝八) 寺子屋(津多慧、好一) 鳴戸(團雀、清二) 太十(昇登、巴住) 酒屋(若好、清二) 大切。七福神(壽老人、佳照、清一。布袋、彌周、三生。大睡天、若好、清二。辨財天、重子、勝八。福祿壽、素昇、猿玉。惠比壽天、小津賀、紋教。昆沙門天、染登、網助)

三好會生る

森三好氏の三好會は十一月廿五日春日町「大國」に於てその創立宴會が催はされ、第一回を十二月十九日江戸川の義太夫研究所で開催。左記番組の外園樂、美蝶、清勝、時昇、岡玉、三佐保諸氏の出

演もあり十時半晚餐を共にし、記念撮影を終つて散會。第二回は一月廿日午後五時より同所に於て開催。

柳(まち子) 先代(歌子) 太十前(龜好) 日吉(喜三香) 瀧(三好)

研藝會忘年會

義太夫研藝會は忘年會として久々に舊臘廿六日午後五時より入谷俱樂部で催はされたが、當夜の收入は會員鶴澤絃平師の病氣見舞金として贈られた由で、近頃美譽として好評を博した。

廿四孝下駄場(良造、團市) 太十(玉勝、玉嬢) 城木屋(團市、千松) 紙屋道之助、越道) 沼津(新造、喜代中) 鰻谷(扇之助、松榮) 以上抽籤順……大切野崎村(總掛合)

保々長平氏の渡支

保々長平氏は氏の友人が上海で事業を企て、着々進行と共にその大會社の専務格ともいふべき人物が心要となり、物故

中であつたがこれといふ適材もなく、遂に氏は義侠に出で、友人の爲め援助すべ

く渡支せられる事になつた。

東京淨瑠璃人形芝居

南北座初春公演

公演の都度好評を博し、満員の盛況を呈してゐる。南北座は、主宰池田三國氏を始め座員一同益々研究練磨に精進し、舊臘は公爵鷹司邸に招待さるゝ等、愈々その技術を認められ、本年は銃後の奉國を目標として大に奮起力演する事になり、先づ初春公演を來る一月廿五日より三日間、濱町日本橋俱樂部に於て開催する事になつた。

(初日) 繪本太功記『夕顔棚(浪花太夫、猿若) 尼ヶ崎(浪花太夫、猿平) 巴太夫、團七) 先代萩(都太夫、辰六) 駒登太夫、扇之助) 野崎村(お染、巴太夫、お光、双葉太夫。母、浪花太夫。久松、松江太夫。久作、駒登太夫) 絃(和孝、ツレ、團七)

(二日目) 攝州合邦辻住吉(松江太夫、和孝) 合邦住家(浪花太夫、團七)

(都太夫、条造) 紙治(浪花太夫、猿平) (駒登太夫、扇之助) 安達(巴太夫、猿喜知) (双葉太夫、辰六)

(三日目) 一谷嫩軍記(巴太夫、猿喜知、(双葉太夫、新造) 壺坂(松江太夫、条一郎) (都太夫、猿平、ツレ猿若) 祇園祭禮信仰記『金園寺(駒登太夫、和孝) 爪生鼠(浪花太夫、条造)

人形配役並操、政岡、お光、玉手、おさん、袖萩、相模、お里、雪姫、(三國) 光秀、八汐、久作、合邦、治兵衛、貞任、熊谷、澤市、大膳(國五郎) 十次郎、お染、俊徳丸、小春、宗任、彌陀六、藤吉、軍平(絃之丞) さつき、榮御前、濱夕、

義經、鬼藤太(才三郎) 久吉、謙杖、入平、梶原(松太郎) 初菊、久松、淺香姫、藤の方、尙信(三春) 正清、下女、軍次(信吉) 千松(國太郎) 鶴千代、お君(新太郎) 沖ノ井(東太郎) 母、五左衛門、義家(清三郎) 母(國若) 丁権、桂壽野(傳造)

星野家の慶事

星野桔梗氏の三女與志子さんは、前外務大臣芳澤謙吉氏の媒酌にて、正金銀行副頭取武内氏の令息龍司氏と十二月三日學士會館に於て芽出度華燭の典を挙げ、なほ長女富貴子さんは先年博文館主大橋新太郎氏の令息に嫁ぎ、重なる慶事に父君桔梗氏の満悦は例へるものなく、慶賀の次第である。

北海道に於ける

豊澤國照師見納會

豊澤團照市の見臺納會は舊臘九日午後五時より望蘭商工會議所樓上で開催され

たが、折しも渡道中の西田可松氏が出演され、小樽より鶴澤徳治郎師の應援など評判となり、室蘭兩見番を始め伊達、札幌方面よりの應援に頗る盛況を呈し、二日月は十日輪西第二分會に於て賑々しく催ほされた。

文樂協會の再組織

文樂協會は人形淨瑠璃協會の一部門として既に組織されてゐたものであるが、紀元二千六百年を機に、文樂の向上並びに後進者養成を目標にその機關として、今回新に同協會の賢實な基礎を築かん爲め、紋下竹本津太夫を始め、豊竹古靱太

夫、豊澤新左衛門、吉田榮三、吉田文五郎等が發企となり、文樂座全員を會員とし、松竹の大西、鈴木兩氏を顧問に人形淨瑠璃各部門の研究と技藝審査を行ひ、いよゝゝ目的達成に進む事になつた。

切(津太夫、友次郎)

由良湊千軒長屋(山の段(南部太夫、重造、伊達太夫、友衛門)(八造、鶴太郎)仙作、(仙松)

關取千兩幟(おとわ、駒太夫。猪名

川、織太夫。大阪屋、富太夫。呼遣、宮

太夫。鐵ヶ嶽、文字太夫)絃(清二郎)

女夫の春駒(和泉太夫、文太夫、さ

の太夫、相瀬太夫、英太夫)絃(叶、吉

左、寛若、吉藏、團作、廣彌)

引ぬき萬才(伊勢太夫、竹太夫、隅

若太夫、松島太夫)絃(仙糸、猿二郎、

團六、吉季、勝芳、延綱)

人形配役(熊谷、甕、彌作、(榮三)相

模、有徳人、おかや(文五郎)雲念坊、

盲目、和助(玉幸)雲才坊、景高(玉市)

安養坊、庄屋(玉徳)信念坊、義經(絃

太郎)彌陀六(玉藏)娘、おらく(榮三

郎)運平、角兵衛(文二郎)藤の局、才

造(小兵吉)忠太、大阪屋(文之助)軍

次(紋司)由良之助、鐵ヶ嶽(門造)猪

名川、才若(政龜)呼遣(兵次)對玉丸、

文七(光之助)白拍子、嘔、安壽姫、お

大阪 文樂座初春興行

一月一日初日座員總動員にて賑々しく初春興行を開演。

京鹿子娘道成寺(シテ、源太夫。ワ

ギ、播路太夫。常子太夫。津廣太夫。ツ

レ、土佐夫太夫。絃(吉彌。友造。友平、

友若。叶太郎、友作。友三郎)

一谷嫩軍記(脇ヶ濱(相生太夫。呂太

夫)絃(新左衛門)陣屋中(大隅太夫、廣助)切(古靱太夫、清六)

三人片輪(甕、盲目、相生太夫。呂

太夫。嘔、伊達太夫。南部太夫。有徳人、

和泉太夫)絃(道八、重造、友衛門、新

太郎、清友、吉藏)

義士銘々傳(彌作中(鍛太夫、寛治郎)

とわ(紋十郎)

巴住會

巴住會は一月十二日午後一時より交正俱樂部に於て初會を開催、各師匠の應援ありて盛況を呈した。

日吉(巴松、巴龍) 橋辨慶(巴駒、昇登、巴住) 安達(壽光、巴住) 赤垣(司、昇登) 紙治(永樂、昇登) 鳴戸(てる子、新兆) 合邦(壽飄、綾秀) 山名屋(松樂、樂登) 寺子屋(秀玉、巴住) 逆櫓(潮、巴住) 沼津(今昔、梅葉) 揚屋(竹玉、重子) 太十(菊水、昇登) 鳴戸(豊、巴駒) 油屋(美福、素昇) 太十(北壽、清二) 寺子屋(一、巴雪) 安達(文晁、小津賀) 寺子屋(龍鳳、昇登) 大切。壺坂(澤市、巴駒、お里、昇登) 絃(巴住、ツレ岬太夫)

大連 淨瑠璃納會

大連に於ける和光會は十一月師匠竹本佐太夫氏を失ひ、會員一同師の冥福を祈

りつゝあつたが、後任師匠として東京より竹本勝昇師を迎へ、近々その披露義太夫會を開催する事になつたが、不取敢十二月十八日藤田競賣所に於て同會主催淨瑠璃納會が催ほされた。

先代(禮子) 合邦(湖聲) 組打(白翁) 忠六(華玉) 太十(柳霞) 陣屋(萬華) 寺子屋(利玉) 揚屋(二龍) 絃(勝昇)

見臺・肩衣

賣りたし

(氏名在社)

寄贈新刊

▼みどり▼土▼淨瑠璃時報▼文樂▼大日本淨瑠璃界▼淨曲研究▼露▼寶塚月報▼淨瑠璃月報▼藝▼京城のラヂオ▼風▼淨曲新報▼斯水▼可樂

花輪◆東花◆籠花◆

謹賀新年

御送迎・御佛事・御見舞は何卒弊店へ御用命願上候
新花・廉價・迅速は弊店の特色

花

下谷稻荷町(青バス車庫前)

サカタ・フロリスト

電話(下谷)六一八一番

太 棹

ニユース

當 座 帳

中。

▽兜會十周年大會 兜會は本年創立

十周年を迎へ、春季大會を十周年記念大會として、六月廿二日日本橋俱樂部に開催する事になつた。

▽水戸部いづみ氏 昨年より神田區

萬世橋警防團々長及び神田區會副議長に就任、其他公共事業に多忙を極めつゝも、寸暇に豊澤仙玉師に就て義太夫に精進。

▽刀劍祭に出演 十二月十日午前十時

より九段軍人會館で刀劍祭が舉行されたが、種々餘興の後に東都五十義會連中にて阿古屋の掛合が上演された。重忠(清)

(阿古屋(三芳) 岩永(桔梗) 榛澤(其柳) 絃(猿之助、ツレ、猿藏、琴、胡弓、芳太郎)

▽竹澤龜次郎氏 竹澤龍造一座主幹竹

澤龜次郎氏は、昨冬一座引卒臺北にて興行中發病、同市日本赤十字社支那醫院に入院、舊臘漸く退院して目下同地に靜養

素

▽安藤光樂氏 世田谷區上馬町三丁目一〇五番地に新居落成。

▽橋本梅月氏 昨冬より病氣靜養中。

▽岩崎山彦氏 十二月廿七日午後八時四十分、安東放送局より「玉三」を放送

▽安藤都昇氏 一月一日大阪へ、五日歸京。

▽乃村乃菊氏 五日名古屋へ、九日歸京翌十日仙臺へ、業務繁忙。

▽水戸部壽氏 いづみと改名。

▽藤井天海氏 新作「譽軍刀後日の箱書、猛將小出少尉」を發表

玄

▽日本帝都義太夫因會 日本義太夫因會と改稱。同會の門標を會員へ配布。

▽日本義太夫因會へ入會者 鶴澤才造、

豊竹岬太夫(再加入) 野澤衆一郎、竹本

浪江太夫、竹本双葉太夫、竹本松江太夫 鶴澤臨三部、竹本相馬太夫(新加入)

▽鶴澤清六 大阪市南區大寶寺町心齋橋東入へ轉居。つるさ旅館を經營、電話南九七六番。

▽竹本清松 清司と改名。

▽豊竹呂太夫 十二月廿日午前七時大阪發、大連より北支方面へ旅行。

謹 賀 新 年

かに・天ふら

御 料 理

深川區白河町一ノ六

(區役所通り)

二 葉

錦 さと

本誌名譽會員

(イロハ順)

(東京之部)

緒方千晴氏
保々長平氏
安藤都昇氏
小川都山氏
吉田登盛氏
安藤どくろ氏
中澤巴氏
北島北斗氏
菅原葉光氏
橋本梅月氏
阿部一氏
吉川浪補氏
廣瀬いろは氏

栗原千鶴氏
岸竹史氏
神馬里芳氏
岡本柳光氏
本木大熊氏
鈴木和樂氏
小林和舟氏
林和勢氏
青山和狂氏
飛石かなめ氏
加藤兜氏
高橋可遊氏
西田可松氏
黒川叶氏

高山和子氏
大用大嘉津氏
田口辰壽氏
疋田大龍氏
井上巽氏
小林太二八氏
根本團壽氏
野田高尾氏
杉山素遊氏
坂倉素遊氏
川口子太郎氏
小埜長とろ氏
宮本武藏氏
萩原うつぼ氏
乃村乃菊氏
中野吳羽氏
石川華笑氏

山下彌生氏
國井やまと氏
松林福笑氏
長谷川文久氏
鈴木兒雀氏
安藤光樂氏
水戸部壽氏
原田越巴氏
河野國聲氏
松岡語松氏
田中湖月氏
湯淺光玉氏
岡崎岡六氏
寶藏寺天昇氏
大築葵氏
松本朝章氏
及川旭氏

猪谷	平井	歸山	前島	日野	星野	淺田	錦	金田	細川	平井	齋藤	木村	寺岡	奥村	中川	柳
銀	軌	歸世	貴	金	桔	奇	錦	金	川	井	山	か	三	三	愛	有
水氏	外氏	花氏	昇氏	泉氏	梗氏	聲氏	松氏	鳳氏	清氏	榮氏	生氏	え氏	幸氏	玉氏	氷氏	明氏

山田	平井	菊池	小原	鈴木	高橋	吉田	池田	北村	野口	横井	吉田	高瀬	岩田	保坂	吉良	岩木
壽	壽	秋	松	松	宮	三	三	三	み	三	美	末	末	有	蟻	義
瓢氏	樂氏	月氏	樂氏	寶氏	古氏	芳氏	國氏	葵氏	な	由氏	句氏	操氏	成氏	曲氏	若氏	雀氏

同	同	米國	(地方之部)	時田	沼井	塚口	近江	白井	松岡	佐野	桑原	平山	高品	武笠	濱口	田口
杉山	武	平野		靜	盛	清	清	清	茂	美	美	平	一	宏	秋	司
陶	榮	一		史氏	鶴氏	雀氏	華氏	華氏	里	昇氏	峰氏	茶氏	重氏	亮氏	華氏	重氏
岳氏	玉氏	昇氏							雄氏							

本誌後授名譽會員を御快諾
賜り難有奉謝候

橋本	黒川	氏家	平井	名譽會員	八幡	同	横濱	下關	船橋	大垣	神戸	大阪	同	同	同	同
梅	川	鶴	軌		古賀	霜島	和田	保良	川奈部	吉岡	岡田	氏家	西本	兼廣	兼廣	廣玉氏
月氏	叶氏	峰氏	外氏		賀	錦	和朝	鈴	銀	十八公	源氏	鶴峰氏	西紫氏			
					彌氏	司氏	朝氏	鳳氏	司氏	氏						

報 討

▼黒川はつ子氏 黒川叶氏令妹はつ子氏は昨冬十一月廿一日午後三時五十分永眠
▼岡本柳光氏 母堂十一月永眠。
▼山崎歌吉氏 永々病臥、十二月三日午前一時永眠。

▼湯淺光玉氏 母堂十二月十日永眠。
▼松岡語松氏 母堂十二月十八日午前一時四十五分永眠。享年八十歳。

▼安藤辰五郎氏 竹本都太夫氏の嚴父辰五郎氏は十二月二日午後五時永眠。享年八十八歳。

▼吉田ふく子氏 吉田美地旬氏の内闈ふく子氏は一月十六日午前八時卅分永眠。

編 輯 後 記

★皇紀二千六百年を誇ほぎ、新年の御慶を申上ます。年改まり愈々活躍を仕り度く何卒御援助をお願い致します。

★昨冬から企劃されました『淨瑠璃同風

會』は快速に成立、兜會は創立十周年を迎へ、東都五十義會は益々氣乗りの態で、一方日本義太夫因會女子部の新年大會に次いで、南北座の公演、帝都の斯界は一月から賑々しく、本年の大會小會の飛躍が豫想致されます。

★『帝都素義名鑑』の發行が大變遅れましたので、前々から御申込みをいたゞいてをります皆様には誠に恐縮の次第ですが、斯うした企ては、今回發行致しますともう十年二十年當分は編算出来ませぬので、お一人でも多く御申込みを願ひ度く、遂々延引致してゐますが、紙がだん／＼高價となり、その苦慮もありますので、今春は早々發行致し度く存じます。未だ御申込みなき諸彦は何卒御賛成を賜りおハガキ一枚いたゞきますれば、直ちに參上仕ります。なほ前々より御申込みの緒氏にて未だお寫眞のなき方々は、誠に恐入りますが至急御貸與賜り度くお願い致します。

★年賀狀を賜りました皆様に厚く御禮申上ます。——芳河 士——

(行發日十回一月毎)		號 一 十 百 第		價		定	
昭 和 十 五 年 一 月 廿 一 日 印 刷 納 本	昭 和 十 五 年 一 月 廿 三 日 發 行	東 京 市 小 石 川 區 音 羽 二 丁 四 番 號	發 行 人 富 取 壽 鹿	東 京 市 牛 込 區 早 稻 田 町 五 八	印 刷 人 栗 原 榮 松	東 京 市 牛 込 區 早 稻 田 町 五 八	印 刷 所 栗 原 印 刷 所
東 京 市 小 石 川 區 音 羽 二 丁 四 番 號	發 行 所 太 棹 社	電 話 番 号 三 一 七 八 五 番		電 話 番 号 二 一 一 五 一 番		一 部 金 三 十 錢	郵 稅 三 錢
廣 告 特 別	一 頁	金 參 拾 圓	一 頁	金 貳 拾 圓	郵 稅 共	六 月 分 金 一 圓 八 十 錢	郵 稅 共
記 念 寫 眞 掲 載 料 は 一 頁 金 拾 五 圓 申 受 ま す	誌 代 は 總 て 前 金 御 拂 込 の 事	代 用 は 一 割 増 但 三 錢 切 手 の 事	代 用 は 總 て 前 金 御 拂 込 の 事	代 用 は 總 て 前 金 御 拂 込 の 事	代 用 は 總 て 前 金 御 拂 込 の 事	一 年 分 金 三 圓	郵 稅 共

近刊 帝都素義名鑑

東都素義界に未だ名鑑のない事を遺憾とします。弊社は皆様の御近影に平素御愛用の語り物を始め、師匠名並に會名其他の略傳を付し、近日「帝都素義名鑑」の刊行を企てました。初め「東都素義名流大鑑」といふ名稱でありましたが、皆様の御意見もあり、今回「帝都素義名鑑」と改める事に致しました。しかし、もつと良い名稱がありましたなら何卒御教示を御願ひ申上ます。

昨年中に刊行の豫定でありましたが、今後こうした名鑑は五年十年の間には編纂不可能と存じますので、此際お一人も多く御賛同を仰ぎ度く、發行を延期致し極力勧誘申上げたいと存じます。

本名鑑は寫真本位として、一頁金拾貳圓（配本共）四六倍版、上質アート、和製チツ入にて装幀の高雅は、皆様の御机上に一層の光彩を添へる事と存じます。

弊社の此の企畫を御援助賜り、何卒御賛同御申込みを偏に御願ひ申上ます。

太
棹
社